

平 尾 山 古 墳 群

—太平寺山手線建設に伴う その1—

1986年度

1989年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

牛駒山地の南端部にあたる通称東山と言われる山地上には古墳時代後期に属する平尾山古墳群が拡がり、日本でも最大級の規模を誇る古墳の密集地域にあたります。

今回の調査区は、太平寺山手線の農道新設に伴う事前の発掘調査で、平尾山古墳群の西端部にあたる地域です。平野と丘陵との境部に位置することから、周辺部の調査例からみても平野部の集落関連遺構と交錯する現象がみられます。同じ地点であっても、墓域である時期と集落域である時期とに分かれます。それは、その時代の社会的な背景が大きく異なっているからに他なりません。

発掘調査によって、墓域である事を示す遺物や遺構と集落域である遺物や遺構が多数検出されました。古墳時代は、古墳そのものを発見出来なかったけれど埴輪や祭祀遺物が出土し、墓域内であった事が窺われ、飛鳥時代から奈良時代までは、鍛冶関係の工房址や住居址等の遺構と日常生活用具類の遺物が検出され、集落遺跡の範囲内に含まれている事が伺い知れた。また、中世の時期は、土器棺が検出され、再び墓域として利用されていた事がわかります。

以上のように、同じ地点でも時代の変化によって土地利用が異なる事がわかります。現在に生きる我々にとっても、また時代に即応した土地開発が必要ですが、埋蔵文化財の遺構や遺物は、長い年月によって次第に崩壊してそれぞれの地域に限定的な状態で遺存しているのです。私達の先祖のかけがえのない重要な遺産と考えます。

平成元年3月

柏原市教育委員会

教育長 庵刀和秀

例　　言

- 本書は、柏原市教育委員会が昭和60年度に実施した太平寺山手線農道の公共事業に伴う事前の緊急発掘調査概要である。
- 発掘調査は、柏原市教育委員会　社会教育課　北野　重を担当者として実施した。調査は、昭和61年1月27日から同年3月20日まで実施した。
- 調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々の参加及び協力を頂いた。

石田 博	竹下 賢	安村俊史	桑野一幸	田中久雄
石田成年	谷口京子	仲井光代	松下 修	西村 威
秋田大介	伊藤泰臣	稻岡利彦	今中太郎	清瀧健二
松村富子	藤本直美	中田ゆかり	江波佐知子	近藤由利
麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎
谷口鉄治	西岡武重	分才春信	道旗甚蔵	森口喜信
山田貞一	乃一敏恵	松皮早苗	横関勢津子	吉居豊子

- 実測中に表示した方位は磁北、標高はT. Pである。
- 本書の編集・執筆は北野が行った。
- 調査の実施にあたって、地元の方々及び柏原市産業課の担当者からご協力を頂いた事を感謝します。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調 査	5
第1節 調査の概要	5
第2節 A区の調査	8
第3節 B区の調査	15
第4節 C区の調査	32
第5節 その他の遺物	32
第4章 まとめ	36

挿 図 目 次

図-1 周辺の遺跡	図-17 炉-6
図-2 調査区位置図	図-18 工房址最終平面図
図-3 付近図	図-19 B-2 トレンチ平面図・断面図
図-4 A-1 トレンチ平面図・断面図	図-20 炉-7
図-5 A-2 トレンチ平面図・断面図	図-21 炉-8、9（上、下）
図-6 A-3 トレンチ平面図・断面図	図-22 炉-10
図-7 A-1 トレンチ土器棺出土遺物	図-23 B-3 トレンチ平面図・断面図
図-8 A-1 トレンチ上器棺出土遺物	図-24 炉-11
図-9 土器棺内出土鉄板	図-25 B-4 トレンチ平面図・断面図
図-10 A-1 トレンチ出土遺物	図-26 B-1 トレンチ出土遺物
図-11 B-1 トレンチ平面図・断面図	図-27 B-2 トレンチ出土遺物
図-12 B-1 トレンチ平面図・断面図	図-28 B-2 トレンチ出土遺物
図-13 炉-3	図-29 C-1 トレンチ平面図・断面図
図-14 B-1 トレンチ炉-1、6	図-30 墓輪
図-15 炉-2	図-31 薙羽口
図-16 炉-4、5（右、左）	図-32 鉄鎌
	図-33 砧石

図 版 目 次

図版1	調査区全景	北側から	南側から
図版2	A-1 トレンチ	上層遺構	土器棺墓
図版3	A-1 トレンチ溝1	溝1上層	溝1下層
図版4	A-2 トレンチ	A 2 トレンチ全景	A 2 トレンチ断面
図版5	B-1 トレンチ炉3	炉3埋土	炉3全景
図版6	B-1 トレンチ炉3	炉3立割断面	炉3床立割断面
図版7	B-1 トレンチ竪穴工房	検出状況	検出状況
図版8	B-1 トレンチ石敷・石列遺構	石敷	石列
図版9	B-1 トレンチ炉1	炉1全景	炉1埋土断面
図版10	B-1 トレンチ炉2、4	炉2全景	炉4全景
図版11	B-1 トレンチ炉6	炉6全景	炉6
図版12	B-1 トレンチ土壤	土壤断面	土壤出土鉄器
図版13	B-1 トレンチ遺物出土状況	砥石出土状況	砥石出土状況
図版14	B-2 トレンチ大溝1	大溝1全景	大溝1肩部石列
図版15	B-2 トレンチ大溝1	大溝1埋土断面	大溝1全景
図版16	B-2 トレンチ炉7	炉7埋土断面	炉7全景
図版17	B-2 トレンチ	B-2 トレンチ平坦部	第11層除去後
図版18	B-2 トレンチ炉8、9	炉8全景	炉8、9検出状況
図版19	B-2 トレンチ炉9	炉9全景	炉9床立割断面
図版20	B-2 トレンチ炉10	炉10検出状況	炉10埋土断面
図版21	B-2 トレンチ遺物出土状況	須恵器出土状況	鉄鎌出土状況
図版22	B-3 トレンチ	B-3 トレンチ断面	炉11全景
図版23	B-3、4 トレンチ	B-3 トレンチ	B-4 トレンチ
図版24	C-1 トレンチ	C-1 トレンチ全景	C-1 トレンチ断面
図版25	出土遺物 その1		
図版26	出土遺物 その2		
図版27	出土遺物 その3	轆羽口	鉄滓

第1章 調査に至る経過

柏原市建設部産業課が太平寺2丁目大字安堂において太平寺山手線の農業用道路新設工事を計画した。当地区は、太平寺集落に東接しうどう畑を中心とした果樹園栽培の盛んな地域で古くから道路の整備が望まれていた。また、柏原市水道局の貯水池が山側上方にあり、施設が老朽化し改築するための資材運搬用の道路がない事も縁因として具体化した。

道路建設に係る費用は、道路予定地の土地所有者が土地を提供して、道路建設費を大阪府及び柏原市が負担するものである。

昭和59年5月9日、産業課より埋蔵文化財の通知書が提出された。柏原市教育委員会は、当地域は、平尾山古墳群の太平寺支群に含まれ太平寺遺跡にも近い事から事前の発掘調査が必要な為、産業課と協議を持った。その中で古墳等の重要な遺構が検出され路線の変更が必要となる事が考えられる為、事前の分布調査を実施した。

昭和60年5月13日、同市教育委員会 田中久雄が現地踏査による分布調査を実施した。調査の結果、多くの遺物が発見された。調査区の北半部は、ややなだらかな丘陵上に段々畑となっており、その耕作土中から弥生時代から中世にかけての遺物が多く出土し、集落遺構や祭祀遺構が存在する事が予想され、南半部は、割合起伏のある丘陵尾根上に古墳が存在する可能性があった。しかし、道路予定地内に古墳が存在する可能性はあるものの明確ではなく、農地開墾によって多くが破壊されていると予想されたため路線の変更するまでには至らなかった。

当計画路線は、全長560m、道路幅4.0mを測る規模で関電道路の取り口道路から太平寺水道貯水池、観音寺の下を通り、寿光会の老人ホーム下までの南北方向の道路である。全区間を4ヶ月計画として実施する事となった。

第Ⅰ期の調査区は、予定地の最北端である。調査は、ぶどうの木にあまり影響のない冬期の棚を下ろした後、昭和61年1月27日から3月20日までの62日間実施した。

今年度の調査は、大きな落差を持つ段々畑の谷筋部から丘陵尾根までの区間で削平する部分と盛土を実施する部分に大きく分かれる。当初、重機によって上層の土層を掘削する予定でいたが、起伏が激しい事やぶどうの棚があり狭い事から全部人力によって実施した。調査の方法は、調査深度が深いため小トレンチを設定し、遺構が確認された場合は、トレンチを拡張するか隣接する場所の調査を実施した。全体をA～Cの3区に分け、さらに1～4小区とした。調査の結果多くの遺構と遺物が検出された。当初の協議により、農業用道路であって完成後に埋管等工事を行わない旨の内容事項があり直接工事に破壊又は影響を受ける範囲に調査をとどめた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

平尾山古墳群は、大阪府柏原市の生駒山地の丘陵上に所在する。柏原市は、大阪の東南部に位置し、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63km、面積24.77km²を測る小都市である。行政区画は、大阪府と奈良県の境に位置し、大阪府側では、北側に八尾市、西側及び南側には藤井寺市、羽曳野市が接し、奈良県側では、北側から三郷町、王子町、香芝町が接している。

生駒山地は、奈良との県境として南北方向に伸び大阪平野の後背地となっている。柏原市域の丘陵は、同山地の中でも低い方に含まれており、標高235mの小松山を中心として幾本かの小支脈が西や南へ派生している。

柏原市内を大和川と石川の2大河川が流れている。大和川は、生駒山地の南端部を蛇行しながら西奔し、河内平野へ流れ出る。石川は、生駒山地の南側に続いている金剛山脈からの水を集めて北流し、市の中央部で大和川と合流している。古い大和川は、この合流地点から北側へ向けて河内平野を貫流していた。この河川の位置と古代遺跡との強いつながりがある事は、古今東西変わる事がないようである。

柏原市域内の生駒山地でも小河川があり、河川によって分けられた丘陵が大小幾つかに分かれる。高井田横穴群の所在する丘陵の北側に流れ出る谷川は、北東方向に伸び、平尾山古墳群の所在する丘陵を大きく2分しており、河内平野に接する丘陵と谷川によって対峙した丘陵とに隔てている。前者は、さらに山ノ井川、谷山渓、宮山渓、岩崎谷の小河川によってさらに小分割が出来る。また、これら的小河川は、丘陵麓の遺跡をも分ける役割を持っている。平尾山古墳群の立地は、主に生駒山地の丘陵上に存在するが、丘陵麓のあたりまで古墳がある。当調査区は、丘陵麓の集落遺跡と古墳群との接点付近に位置し、時代によって集落と墓域の区画線が上下動する場所である。

第2節 歴史的環境

生駒山地の西麓部には、多くの集落遺跡が存在し、縄文時代から近世までの多くの遺構と遺物が検出されている。当地域周辺部の遺跡群を最近の調査例を加え若干の説明を加えたい。

旧石器時代の遺跡は、近年調査が増えこれまで船橋遺跡、玉手山遺跡、田辺遺跡の他に、国府型ナイフ¹⁾が出土した安堂遺跡、有舌尖頭器²⁾が出土した大畠南遺跡が数えられる。大和川対岸には、国府遺跡、はざみ山遺跡等拠点的な遺跡がある。³⁾

縄文時代の遺跡は、生駒山地の谷山渓の扇状地状台地に拡がる大畠遺跡を中心として集落遺跡で発見されている。早期に属する押型文土器を始めとして、前期、中期、後期、晩期の遺構

⁴⁾と遺物が検出されている。周辺の遺跡として、生駒西麓部に恩智遺跡が約2km北側に見られ、大和川の対岸には、国府遺跡、船橋遺跡、本郷遺跡等の著名な大遺跡が連なっている。

弥生時代は、大県遺跡を中心として、北側から山ノ井、平野、大県、大県南、太平寺、安堂遺跡が母子村関係を持ち1つの共同体を形成していたと考えられる。また、大県遺跡を鳥瞰する東山丘陵上の高尾山（標高250m）に弥生中期から後期にかけての高地性集落が存在し、大県鏡として有名な多網細文鏡が近隣から出土している。近年、当時代の集落遺跡の発掘調査も急増して徐々に古環境復原が成されつつあるが、遺跡深度が深いことや大規模開発がないことから遺跡の平面的考察が不十分な状況である。

古墳時代は、弥生時代に引き続き集落遺跡が継続する。しかし、現在前期にあたる遺物や遺構が少なく、中期以降に遺跡全体が活況を呈すると考えられる。特に、鍛冶関係の遺物と遺構は、大阪府下最大規模を誇り、鍛冶専門集団の居住が想定されている。鍛冶炉の検出や鉄滓、⁵⁾轆羽口、砥石等の遺物が多数出土しており、鉄器生産過程や生産集団のあり方が問われるところである。東山一帯に拡がる平尾山古墳群は、総数1400基を数え、前期から後期まで継続して造られる。前・中期の古墳は、前方後円墳、前方後方墳、円墳等が丘陵縁辺部の尾根筋に造られている。⁶⁾後期の古墳は、丘陵縁辺部から主に丘陵内部まで広く拡散して造られる。これらの古墳は、近辺の集落遺跡と対応する古墳群と何らかの政治的背景を持つ集団の古墳群とに分けられている。今後、これらの古墳の立地、規模、内部主体、副葬品等から系統的な分類と検討が必要である。

飛鳥・奈良時代になると、当地域には密集して古代寺院が建立される。生駒西麓部には、日本書紀に記載される寺「智識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂」の河内六寺が建ち並ぶ。近年これらの寺院の寺域内外の調査が実施され、寺院関連遺物や遺構が検出され、その位置、規模、時期等が明らかになりつつある。大県庵寺から大里寺、鳥坂寺から鳥坂寺と記載された墨書き土器が出土し、寺院の比定地が考古学的に実証されている。市域には、この他に船橋庵寺、片山庵寺、原山庵寺、五十村庵寺、田辺庵寺、東条尼平庵寺、河内国分寺、河内国分尼寺等の飛鳥時代から奈良時代に至る寺院が多く存在する。この他にも、大県郡衙、智識寺南行宮、竹原井行宮、津横駅家等の遺跡も存在し、繁栄した時代の様子が垣間見られる。

注1 柏原市教育委員会 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」 1983年3月

注2 柏原市教育委員会 「大県南遺跡」 1985年3月

注3 大阪府教育委員会 「はざみ山遺跡発掘調査概要」 1986年

注4 柏原市教育委員会 「大県・大県南遺跡」 1984年3月

注5 柏原市教育委員会 「大県・大県南遺跡」 1985年3月

注6 大阪府教育委員会 「平尾山古墳群分布調査概要」 1975年3月



図-1 周辺の遺跡

第3章 調査

第1節 調査の概要

調査は、昭和61年1月27日から同年3月20日までの42日間実施した。分布調査によって、現地のぶどう畑で弥生時代から中世にかけての遺物の散布を確認しており、古墳の存在や祭址遺構あるいは集落関連の遺構を確認する可能性がある為、各トレンチの掘削を慎重に実施した。

調査地は、標高40~50m測り段々畑の斜面地にあたる。調査トレンチは、各畑ごとに調査区を設定し、上段からA、B、C区とした。また、トレンチの番号を北側から1、2、3と名称した。幅員4mの道路建設であるため調査範囲が狭く限定的な調査区の設定となった。B-1トレンチは、当初3×4mの調査区を設定したが、古墳時代後期から奈良時代にかけての鍛冶関係遺構が検出された為、2度の拡張を実施した。

遺構は、中世の土器棺墓、性格のよくわからない炉と、古墳時代から奈良時代にかけての鍛冶炉、土壙、ピット、溝等を検出した。特に鍛冶炉は、B-1トレンチで6基、B-2トレンチで4基、B-3トレンチで1基を検出した。

遺物は、各遺構及び遺物包含層から多量に出土した。土師器、須恵器を主にし、埴輪、鉄滓、輪羽口、砥石、鉄器等が出土した。



図-2 調査区位置図

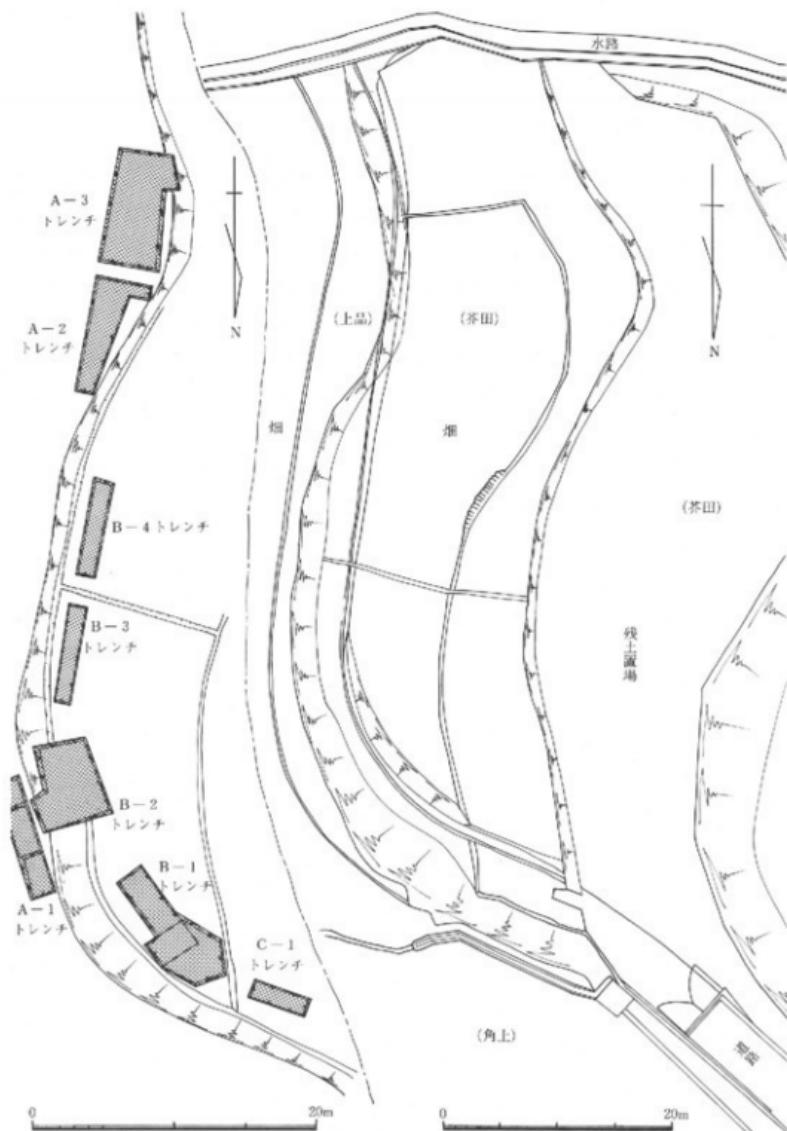


図-3 付近図

第2節 A区の調査

A-1 トレンチ

A-1 トレンチは、調査区の北東隅部にあたり、最も標高の高い畑内のトレンチである。南北方向8.5m、東西幅1.8mの範囲である。調査区は、当初予想より遺跡が深い為調査安全を計るため部分的な掘削にとどめた。

基本土層は、上層から、表土（1層）、黄灰色粘質土（2層）、薄灰青色粘質土（4層）、黄茶灰色粘質土（5層）、薄茶褐色粘質土（6層）、黄緑灰色シルト粘土（7層）、黄茶褐色粘質土（9層）、茶灰色粘質土（10層）である。7層までが中世の堆積土であり、下層は奈良時代以前の堆積土である。

遺構は、土釜を5ヶ組せた土器棺墓を検出した。この遺構は、当初断面図作製後断面の中にある遺物を取り出す作業中土釜の端部を発見した事からその存在を確認した。7層より下層に幅約50cmの円形土壤を掘削し、4ヶの土釜を底部に置きその上に1ヶの土釜を据えている。深さは約50cmである。埋土は、黄灰色粘質土で割合良質の土層である。上面には、人頭大の自然石が5ヶ並べていた。土器棺の標石として置かれていたものであろう。土釜の中にはそれぞれ多くの遺物が組入れられ、土師器の大小皿多数と銅錢、鉄板が確認された。また、これらの遺物と混じって炭の小破片が多く見られた。このような出土例は初見のものであるが、当遺跡の北側にある大県南遺跡82-1次調査区の溝2の埋土中から1ヶの土釜を検出し、上師器の皿を中心に入れていた。この他に富田林市龍泉寺からも大県南遺跡と同様の事例が報告されている。

黄灰色粘質土（11層）、黄灰色粘土（14層）は、奈良時代を前後する土師器と須恵器が出土した。また、炭が斑点状に混入し、鉄滓や鰐羽口も見られた。地山は、黄灰色粘質土で、北側から南側に向けて急な傾斜を呈している。

南側部から、溝1を検出した。B-1 トレンチに続いている。範囲が狭い為溝の幅が不明であるが、B-2 トレンチより大幅狭くなっている、扇形の溝となる様子である。溝の北側肩部を検出した。埋土は、明茶褐色粘質土、青灰色粘質土である。下層には、10~50cmの砾を多く含む。溝の掘方は2段に落込んでおり、階段状を呈し、部分的に石列が見られた。石列は、溝方向と同じく東西方向の谷筋に向かって伸びている。

出土遺物は、古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、土師器がある。当地区は、現在（冬の湯水期）でも湧水があり、古くから水取口として石組みの遺構が造られていたものと考えられる。溝はさらに東側へと続いており、鍛冶関係の工房の一端を構成すると想定される。中世期の土器棺墓は、一基だけであり、他の調査区ではその痕跡は見られない。同様の土器破片及び瓦器や陶磁器類も出土していない、この時期においては、集落関係の遺構ではなく、墓域となっていたと考えられる。

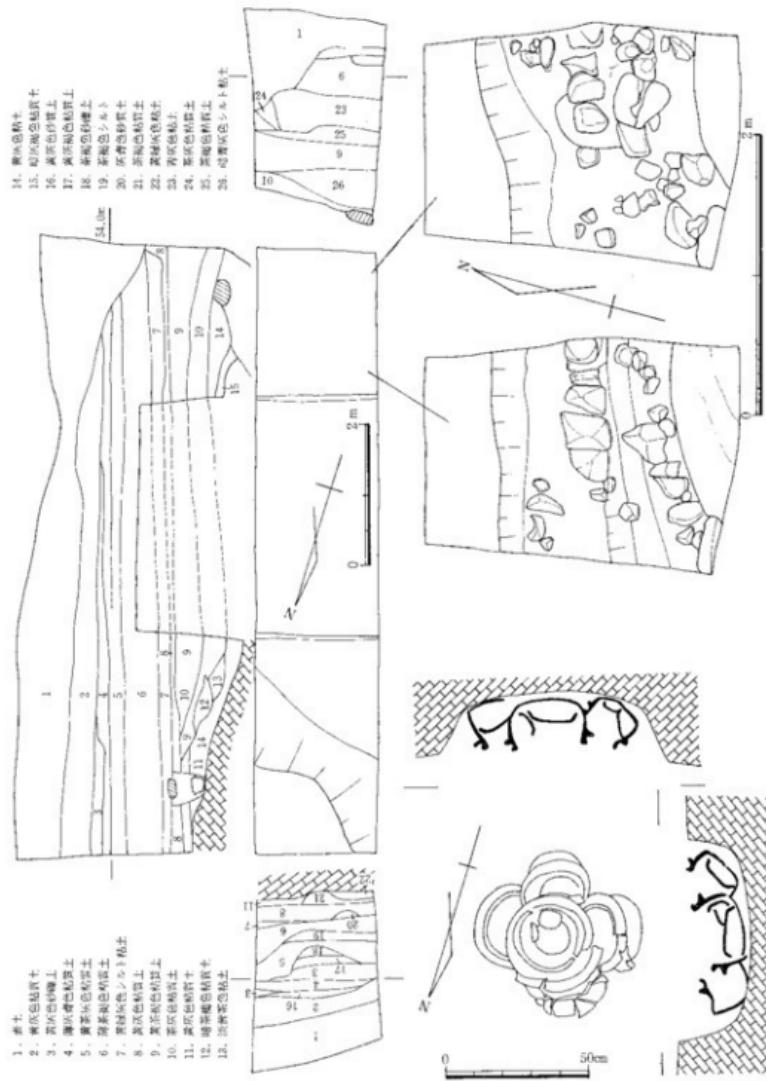


図-4 A-1 トレンチ平面図・断面図

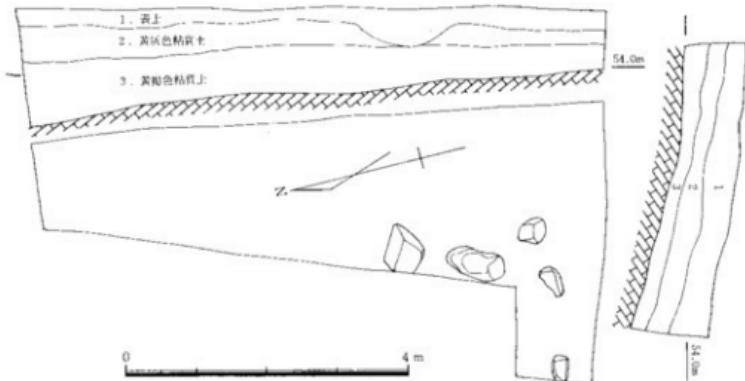


図-5 A-2 トレンチ平面図・断面図

A-2 トレンチ

A-2 トレンチは、A-1 トレンチの南側へ約28mの位置へ設定した。当地点は、小尾根の北側部分にあたり、直ぐ東側には畑の開墾によって地山が露出している部分があり、A-1 トレンチとは相違して浅く古墳に関わる遺構及び遺物の出土が予想された。

トレンチは、南北8.5m、東西1.5~4.0mの範囲で実施した。基本土層は、上層から、表土（1層）、黄灰色粘質土（2層）、黄褐色粘質土（3層）である。1層は、ぶどう畑の耕作土である。2層は、粘質土であるが砂粒を多く含み砂質土に近い上層である。3層は、2層より粘性が強く堅く締まっている。トレンチの北半部では地山が花崗岩となっており、南半部では黄褐色粘質土である。

遺構は、確認されなかった。3層中トレンチの西側部分に、40~80cm位の大きな花崗岩が出土した。古墳の石室の残骸ではなく単なる転落石と考えられる。

遺物は、各土層ともわずかで、土師器、須恵器の細片のみである。時期の判るものは出土しなかった。

A-3 トレンチ

A-3 トレンチは、A-2 トレンチに南接して設定した。当地点は、小尾根の中心部にあたりA-2 トレンチと同様の状況を呈する。トレンチは、東西4.0~5.0m、南北8.0mの規模で、深さ0.8~1.0mを測る。基本土層は、灰褐色砂質土（1）、黄褐色粘質土（3）、灰黄褐色砂質土（5）、暗黄褐色砂質土（6）である。3層は、細礫を含み砂質土に近い。5層は3層よりかなり多くの砂礫を含んでいる。6層は、3層と同様に細礫を含む。細礫は、花崗岩の粉砕したもので東側の丘陵上方から転落した堆積土である。

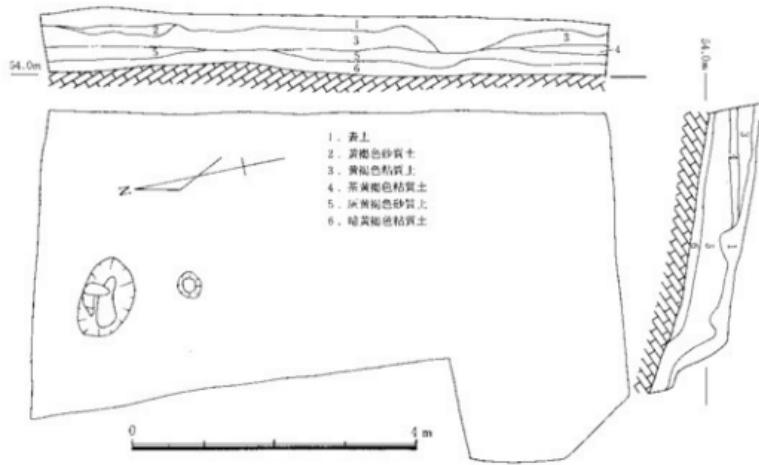


図-6 A3 トレンチ平面図・断面図

遺構は、北側部分に2つのピット状の落ち込みを検出した。ピット1は、南北0.6m、東西1.0m、深さ0.6mを測る。ピット内には10~40cmの小石を含み埋土中には炭が少し含まれていた。ピット2は、30×40cm、深さ30cmを測る。それぞれ出土遺物はなく時期は不明である。

出土遺物

A-1 トレンチから出土した遺物は、土器棺墓から出土した土釜と土師器大小皿、鉄板、銅鏡があり、溝及び遺物包含層から土師器、須恵器、鉄滓、輪羽口が出土した。

1~6は、中央部に置かれた土釜内から出土した土師器小皿である。口径約9cm、器高は、1.5~1.7cmの範囲である。調整は、内外面ナデ調整で、口縁部外面を軽くヨコナデし端部を外反させる。胎土は、金雲母、クサリ疊を含む。色調は、明茶灰色である。

7は、土師器大皿で、口径14.8cm、器高2.6cmを測る。胎土色調は、土師器小皿と同様である。口縁部外面を軽くヨコナデし、口縁部は真直ぐ外方に伸びている。

8は、土師器の土釜である。口縁部が内弯した後大きく外上方に折り返す「く」の字形の形態のもので、体部上方に短く水平に鈎が付く。体部から底部にかけては偏平である。口径22.0cm、器高17.0cmを測る。内外面を横方向の板ナデを行う。色調は、明茶灰色を呈し、鈎や内外面に2次焼成がみられる。胎土は、石英、長石の砂粒を多く含む。大小皿の置方は、小皿を俯かせ、その上に大皿、さらに鉄板、小皿5枚を同様にのせていた。

9~14は、土壤の西側底部に置かれた土釜内の土師器小皿である。形態、胎土、色調は、1

～6までの小図と同様である。大図についても同様のものである。

16は、21.0cm、器高15.0cmを測り、8と同様の形態を成すが、「く」の字形の口縁端部は、屈折後あまり肥厚せず尖り気味に終わる。調整も内外面横方向の板ナデを行う。体部内に入れられた遺物の置方は、大皿を俯かせ、その上に鉄板、小皿6枚を同様にのせる。小皿は、2枚重ねが2組と1枚2組に置かれていた。

17~26は、土壤の南側下層の土釜から出土した遺物である。17~22は、口径8.5~9.0cm、器高1.5~1.8cmの土師器小皿である。形態等については前述の小皿と同様である。23~25は土師器大皿である。前述の2例の土釜内には1枚しかなかったが、3枚の出土である。口径は、14.5~15.0cm、器高は、2.7~2.9cmを測る同一形態のものである。

26の土釜は、口径22.5cm、器高14.2cmを測る。口縁部は、16の土釜と同様尖り気味に終わる。土釜内の遺物の置方は、鉄板を最底部に置き、大皿、小皿6枚、大皿2枚を俯かせて積み上げている。

27~37は、土壇東側底部に納置された遺物である。27~32は、土師器小皿6枚である。33~36は、土師器大皿4枚である。口径14.5~15.3cm、器高2.5~2.8cmとほぼ均一の大きさである。37は、口径22.0cm、器高12.5cmを測り、口縁部の形状は、8によく似ている。

上釜内の遺物の配置は、底部に銅鏡 2 枚重ねを置き、小皿を 2 枚並列し、その上に大皿、その上に鉄板、その上に小皿 2 枚、大皿 2 枚と小皿 2 枚を俯かせて積み上げている。

40~47は、土壤北側底部に納置された遺物である。40~45までが土師小皿である。これらはいずれも同一形態のものである。土師大皿は1点あり、上述の大皿とほぼ同一である。47の土釜は、口径24.0cm、器高16.9cmを測る。

土釜内の遺物の配置は、底部に鉄板を置き、その上に腐食の激しい木片がみられた。さらにその上に大皿があり、小皿が6枚積み重ねていた。

土師器大小皿は、同一胎土のものであり、金雲母やくさり礫を含んでいる。当地域でよく出土する生駒西麓産の胎土ではないが、河内産のものであろう。土釜についても同様の胎土である。ただ七釜は煮沸器である為、砂粒を多数混入させている。銅錢は、1点は富春神宝であるが他1点は判読出来なかった。

出土遺物	上釜	中央	東方	南方	西方	北方
小 盆	6	6	6	6	6	6
大 盆	1	4	3	1	1	
鐵 板	1	1	1	1	1	
銅 錢	0	2	0	0	0	
合 計	8	13	10	8	8	

土器棺出土遺物の比較表を右に示した。

表-1 士器棺出土遗物数

このような出土例は、大県南82-1 次調査区の溝2より出土した土釜の中から土師器の小皿13ヶ、鹿児寺第3條跡の土釜の中から土師器小皿が21ヶと10ヶの瓦器皿が出土している。

鉄板は、各上蓋から1点ずつ出土した。大きさは、横幅1.3~1.7cm、長さ8.1~9.0cm、厚さ

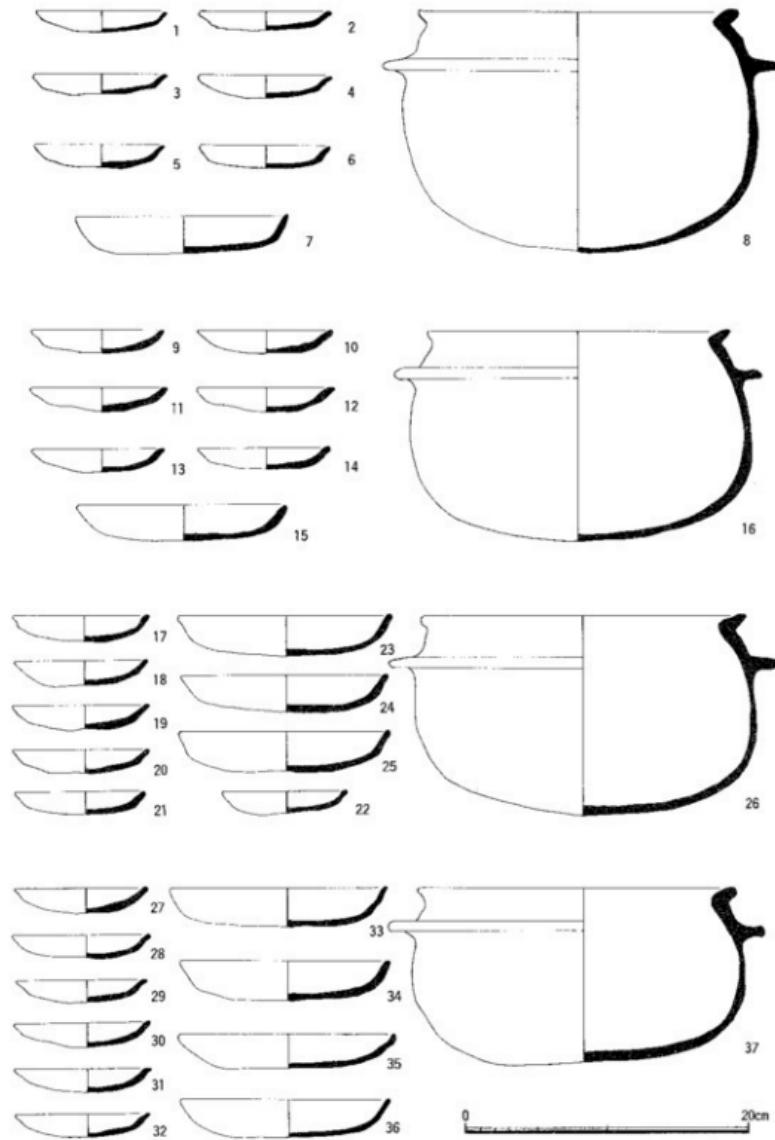


図-7 A-1 トレンチ土器棺出土遺物

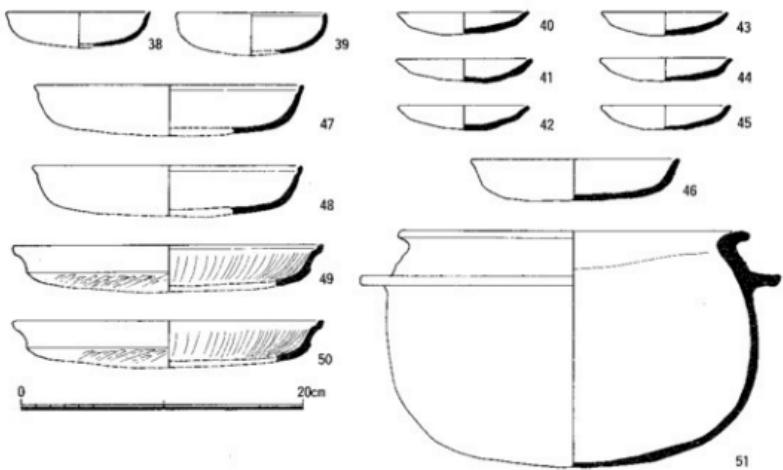


図-8 A-1 トレンチ出土遺物

0.5~0.8cmである。当初小刀と考えられたが、断面は長方形を呈し、小札状を呈する鉄製板である。出土場所は、土釜の一番底部に置いたもの、大皿の上に置いたものと一定していない。重量は、中央部の土釜から出土した鉄板(52)は、24g。東方の土釜から出土したもの(55)は、24g。西方の土釜から出土したもの(54)は、11g。南方から出土したもの(56)は、19g。北方から出土したもの(53)は、15gを測る。

A-1 トレンチ出土遺物

A-1 トレンチから出土した遺物は、土器
棺を除いて、土師器、須恵器、礪羽口、鐵滓、
埴輪、瓦等がある。

土師器は、杯、皿、高杯、甕、把手付鉢があり、順次説明を加えていきたい。

杯(38、39)は、口径10.0、10.5cm、器高は、2.5、3.0cmを測る偏平なものである。調整は、内外面ナデ調整で暗文はみられない。胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む。色調は、明茶灰色を呈す。

皿(48~51)は、口径18.7~21.5cm、器高は、3.3~3.6cmを測る。口縁端部は、内側に

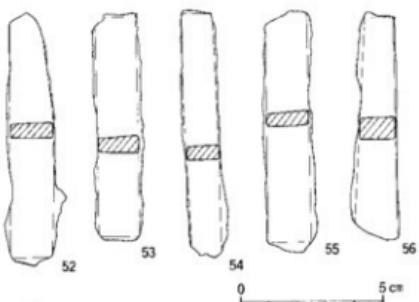


図-9 土器棺出土鉄板

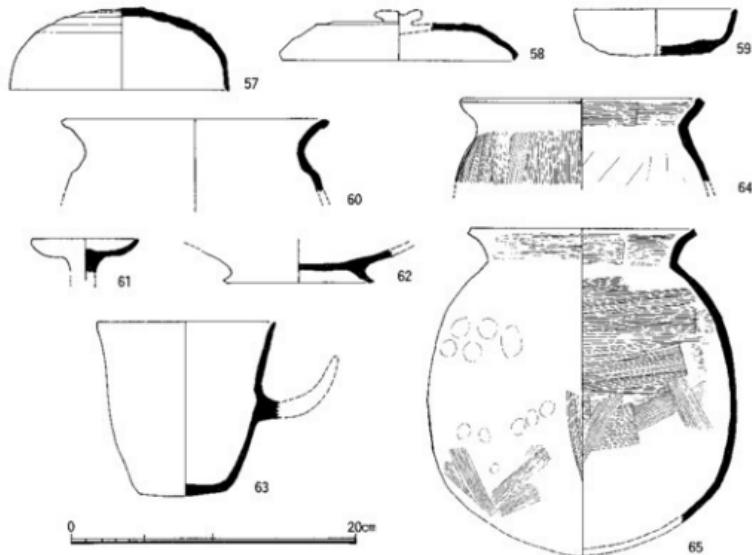


図-10 A-1 トレンチ出土遺物

丸く肥厚する。50は、強く外反した後内側へ巻き込むように終わらせている。調整は、外底面をヘラ削りをし、内面に放射状に暗文を施す。

62は、高台の持つ皿の底部であろう。高台は、外側に拵がり尖り気味の端部である。調整は、内外面共にナデ調整で、暗文はみられない。61は、小型の手捏高杯の杯部である。

60は、壺の口縁部である。外側へ大きく外反し、端部は外側へ丸く肥厚する。内外面ナデ調整である。64は、口縁部は内凹気味に外上方に伸び、内側に肥厚して終わる。外面はタテハケ目調整で、内面は板ナデ調整である。色調は、茶灰色を呈し、当地域産の胎土である。

64は、口縁部が外反し、端部外面に沈線を施している。内外面の調整は、板ナデを主に施し、体部外面は、その後に指押さえを行う。

須恵器は、杯のみが実測した。他に壺又は壺の体部破片が出土している。57は、杯蓋である。口径15.2cm、器高5.7cm、天井部はやや丸く、口縁部はわずかに外反する端部を持つ。口縁部と天井部との境には稜はほとんどみられない。58は、偏平なつまみの付く蓋で、反りがない。59は、杯身である。口径11.3cm、器高3.5cmを測る。底部は、ヘラ切り未調整である。

A-1 トレンチから出土した遺物は、中世と古墳時代後期から奈良時代までの2時期に分かれる。中世は、土師器の大小皿や土釜の形態から12~13世紀にかけてのものだろう。後者は、6世紀代の遺物も少し含まれるが、大部分は、7、8世紀代の遺物である。

第3節 B区の調査

B-1 トレンチ

B-1 トレンチは、A-1 トレンチの西側の一段下側の畑内にあたり、段差約 2m を測る。規模は、東西 2.2m、南北 5.0m の方形トレンチを設定した。

基本土層は、上層から、表土（1層）、灰褐色粘質土（2層）、黄茶灰色砂礫土（3層）、薄茶灰色粘質土（4層）、茶黃灰色砂礫土（6層）、黄褐色粘質土（9層）、茶褐色粘質土（10層）である。1層は、畑の耕作土である。2層は、砂粒を多く含み砂質土に近い。3層は、2~5cm位の細砂礫を多く含む。4層は、10~15cm 大の礫を含むが粘性が高い土層である。6層は、細礫と 2~5cm の礫を多く非常に多く含む。7、8 層には、4~20cm の礫が多く混在しており層位が互層になり徐々に堆積している事がわかる。9 層は、5cm 大の礫を少し含む。この土層は、上層の砂礫土が割合堅い土層であるのに対して柔らかい。10 層は、11 層より多く砂粒を含む。これらの土層は、東側から西側に徐々に傾斜しているが、水平堆積に近い様相を呈している。

トレンチの深度は、南東隅で 1m、北西隅で 2.2m を測る。

遺構は、北端部で石列を検出した。この石列は、多くの石を平坦な面をほぼ同一の高さに敷き並べており石全体がよく焼成を受けた状態である。この石は、鍛冶に金床台として使用したものである。この石敷の検出により北側に調査区を拡張した。南側にある石は、50~60cm 大の自然石であり、B-2 トレンチで検出した石垣と同様の石のくずれたものかもしれない。

出土遺物は、須恵器、土師器、鶴羽口、鉄滓、砥石等があり、次項でより詳細に説明を加えたい。

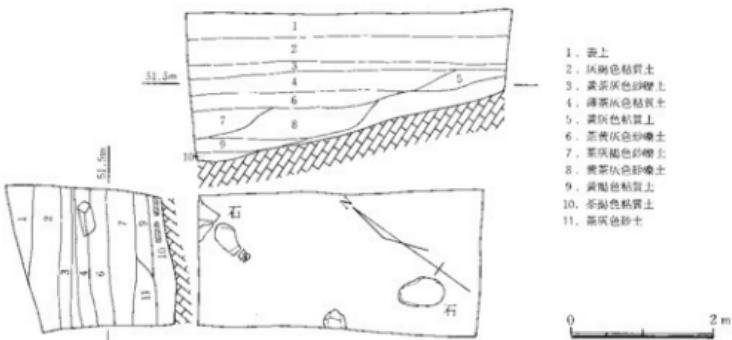
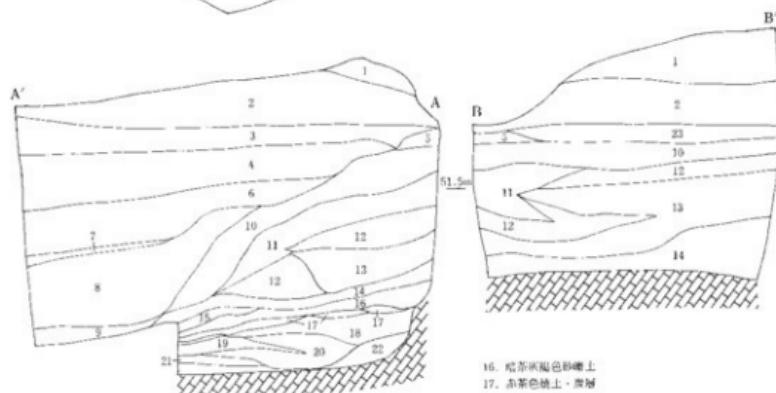
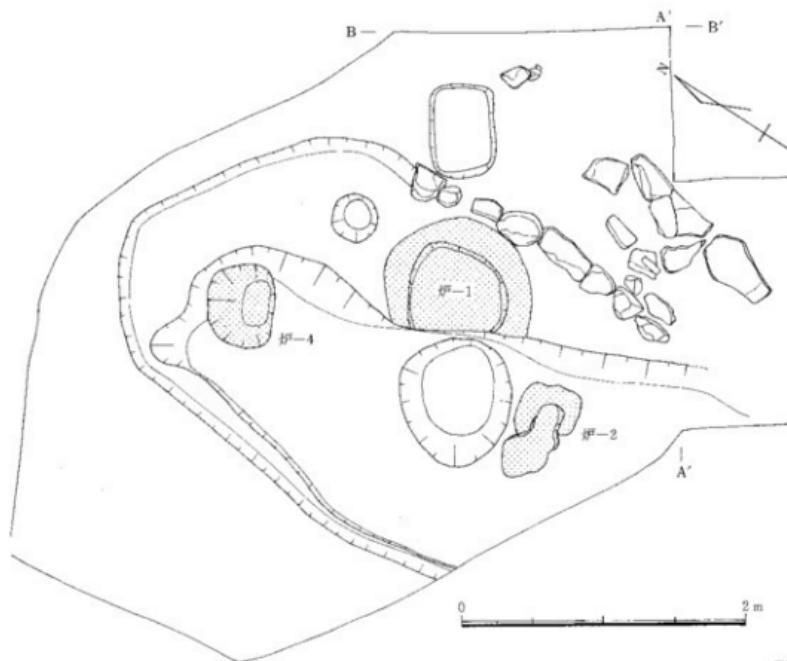


図-11 B-1 トレンチ平面図・断面図



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 黑土 | 6. 坡面褐色粘质土 | 11. 黑茶褐色粘质土 | 16. 坡面深褐色砂砾土 |
| 2. 暗褐色粘质土 | 7. 黄茶褐色粘质土 | 12. 茶褐色粘质土 | 17. 茶茶色粘土，腐层 |
| 3. 深青色粘质土 | 8. 黄茶褐色粘质土 | 13. 黄茶褐色砂砾土 | 18. 黄褐色粘质土 |
| 4. 黑褐色粘质土 | 9. 黄茶褐色粘质土 | 14. 黄茶褐色粘质土 | 19. 黑灰色砂质土 |
| 5. 黑灰褐色粘质土 | 10. 黄茶褐色粘质土 | 15. 黄褐色粘质土 | 20. 黄茶褐色砂质土 |
| | | | 21. 黄褐色粘质土 |
| | | | 22. 深青色粘质土 |
| | | | 23. 灰青色粘质土 |

图-12 B-1 トレーナー平面図・断面図

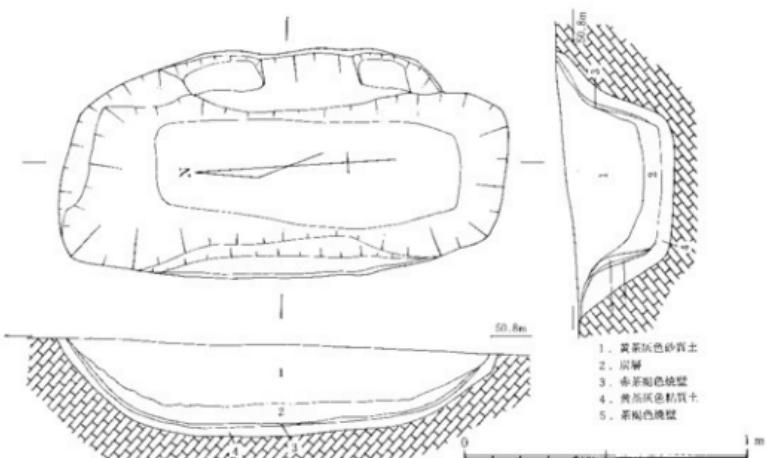


図-13 炉-3

B-1 トレンチの北端部に石列遺構を検出した事から調査区は、自然地形及び掘削深度が深い為変形のトレンチとなった。

基本土層は、表土（1層）、灰褐色粘質土（2層）、灰青色粘質土（3層）、茶褐色粘質土（4層）、灰茶褐色粘質土（6層）、黄茶灰色粘質土（8層）、黄茶褐色砂質土（9層）である。また、当地点は、丘陵の崖斜面の一番下側にあたり、茶灰褐色砂疊上（5層）、黄茶灰色砂疊土（10層）、黒茶褐色粘質土（11層）、茶褐色粘質土（12層）、茶灰褐色砂疊土（13層）は、転落して堆積した土層である。

遺構は、黄茶灰色砂質土（7層）除去後に、窯状遺構1基と8層の下層に多くの炉を構築した製鉄に関連した工房址を検出した。

窯状遺構は、炉-3と名称する。南北方向に長軸を持ち、隅丸長方形を成す。東側には小さな段を呈するテラス状の施設が左右対象に付設している。大きさは、長径1.55m、短径0.97mを測る。掘方断面は、やや丸味を帯びた逆台形である。底部は、 $0.7 \times 1.2\text{m}$ の平坦面を持っている。埋土は、黄茶灰色砂質土（1層）、炭層（2層）である。1層は、上層と同質土である。2層は、直徑0.5~3 cm位の炭を多く含み、大層よく燃焼している。しかし、底部中央部に不完全燃焼した生焼けの木や竹が遺存しており、炭を焼いた状況は見当らない。何を焼成する目的の窯か不明で炭以外の土器類の出土も皆無である。西側長辺部は特によく燃焼しており、肩部から底部にかけて焼壁（1~2.5cm厚）がくずれ込んでいた。この焼壁の量は、天井部を囲う程の量ではなく小量である。炉の内部は、赤茶褐色によく焼けている。部分的には、粘土を

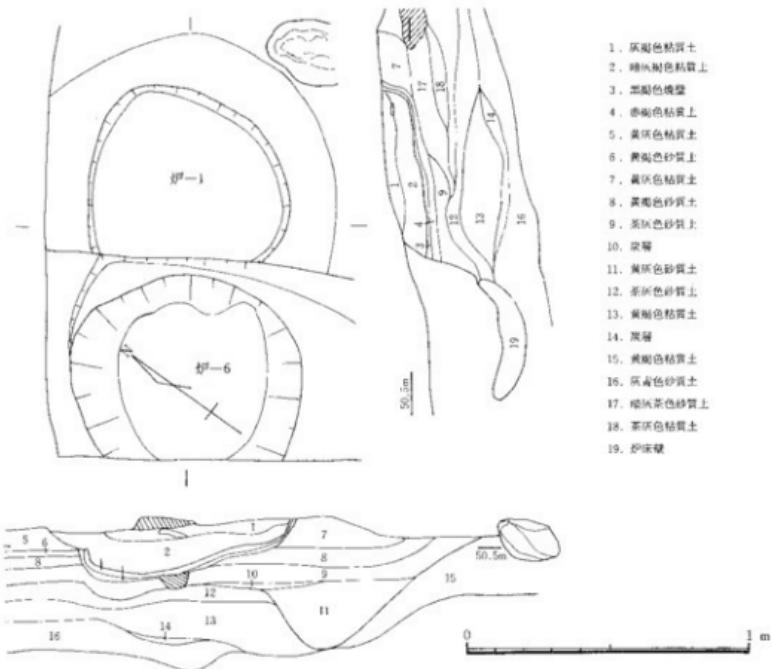


図-14 B-1 トレンチ炉-1、6

貼り付けているのが観察される。長軸方向は、ほぼ磁北を向いている。時期は、中世と考えられる。このような規模や類似した形態の炉は、玉手山遺跡の83-1次調査区で検出されているが、同様用途は不明である。

下層の工房址は、隅丸長方形の堅穴住居状を呈する。規模は、東西方向2.6m、南北3.5m以上、深さ約40cmを測る。東端部には、20~40cm大の自然石を、長軸を南北方向に連ね並べている。2又は3段に積み上げている部分もみられる。この石列遺構南東方向の直ぐ横には、拡張前に検出した石列がある。この石列の下から磁石(168)が出土した。石列の北東方向直ぐ隣に、南北方向0.45m、東西方向0.65mの隅丸長方形の土壌を検出した。上部は削平されているが、炭を入れた土壌と考えられる。位置的にも高い場所にあり、通気性がよいようと思われる。工房址の中には、計5基の炉を検出した。同一平面に存在するものではなく、層位的に分かれている。炉-1が最も新しく、次に炉-6又は炉-2、次に炉-4と炉-5がある。

出土遺物は、工房址の埋土中から土器、須恵器、鐵滓、輪羽口等が多量に出上した。各炉毎に説明を加えていきたい。

炉-1

工房址の中央部東側から検出した炉で、最上層から検出した。東西方向0.64cm、南北方向0.70cmの変球形を成している。側壁は、垂直に近く外側に開き気味に立ち上がり、底部は、平坦である。埋土は、灰褐色粘質土（1層）、暗灰褐色粘質土（2層）がある。1層中には、少しの炭と炉壁が混入していた。2層は、1層より多量の炭と炉壁がみられ、上器の破片も多かった。底部は、黒褐色焼壁でよく焼けている。

炉-6

炉-1の直ぐ西側に検出した炉である。規模は、東西方向0.45m、南北方向0.55mの楕円形を呈する。底部は球状に丸くなっている。炉の底部は非常によく焼成を受け、堅密に固まっている。色調は、緑灰色又は灰青色を呈し、炉-1の焼壁とは構築方法がまったく別の用途が考えられる。緑灰色焼壁の厚さは、5cm以上の厚さの部分もみられ、その下層は、赤褐色に酸化している。

炉-2

炉-6の直ぐ南側に炉-2を検出した。西側から焚口のように掘り込まれており、上面に赤茶褐色焼床がある。その下層は、酸化し、赤灰色に熱影響を受けている。焚口部の底には、炭屑が堆積している。

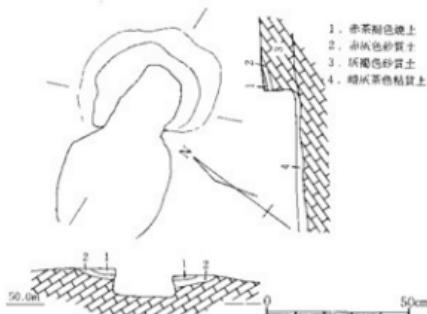


図-15 炉-2

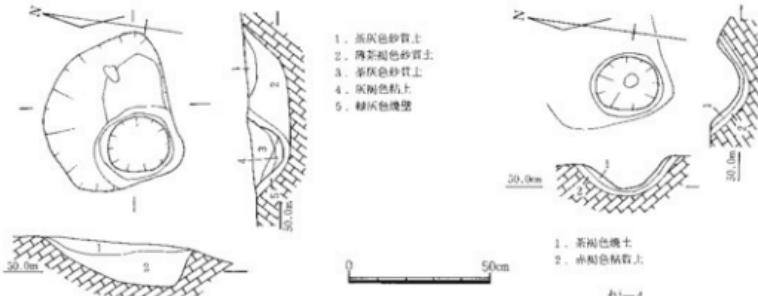


図-16 炉-4、5（右、左）

炉-4

炉-4は、工房址の北側部に検出された。平面プランは、東西方向0.18m、南北方向0.22mのほぼ円形を成す。掘方断面も球状を呈し、炉壁は、茶褐色である。厚さは2~3cm程度を測り、その下層は、熱影響を受けて赤褐色に変化している。

炉-5

炉-4を含めて同一遺構とすべきかもしれないが、炉-4の以前に造られた様子がみられたので別の炉とした。規模は、東西方向0.55m、南北方向0.45mを測る。堆土は、茶灰色砂質土（1層）、薄茶褐色砂質土（2層）がある。1層は、少量の炭を含んでいる。2層は、1層よりも多く炭を含んでいる。また、同土層から鉄滓、銅滓が出土している。炉-4、5の下層遺構として、地山を掘り下げた円形土壙を検出した。この土壙は、炉を構築す

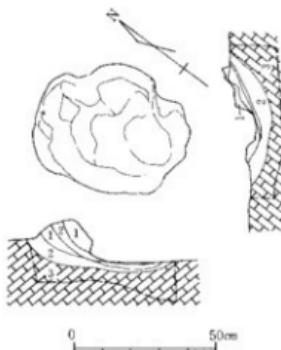


図-17 炉-6

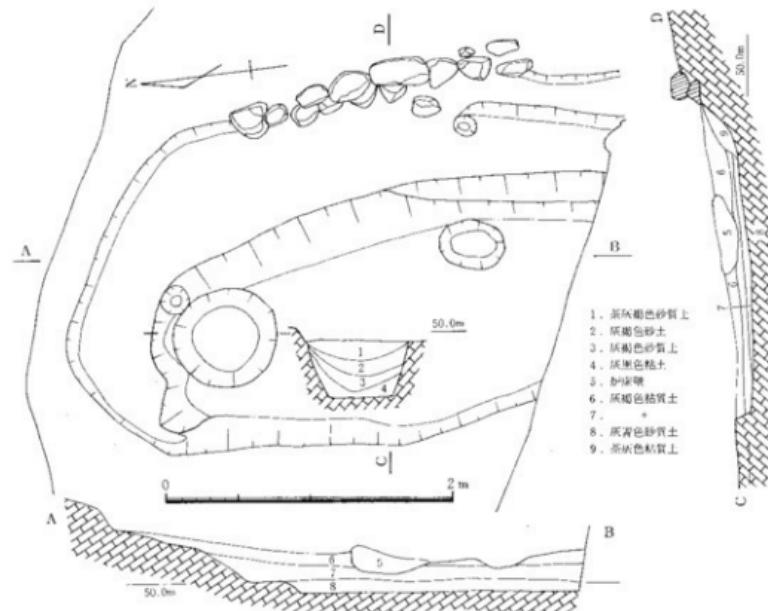


図-18 工房址最終平面図

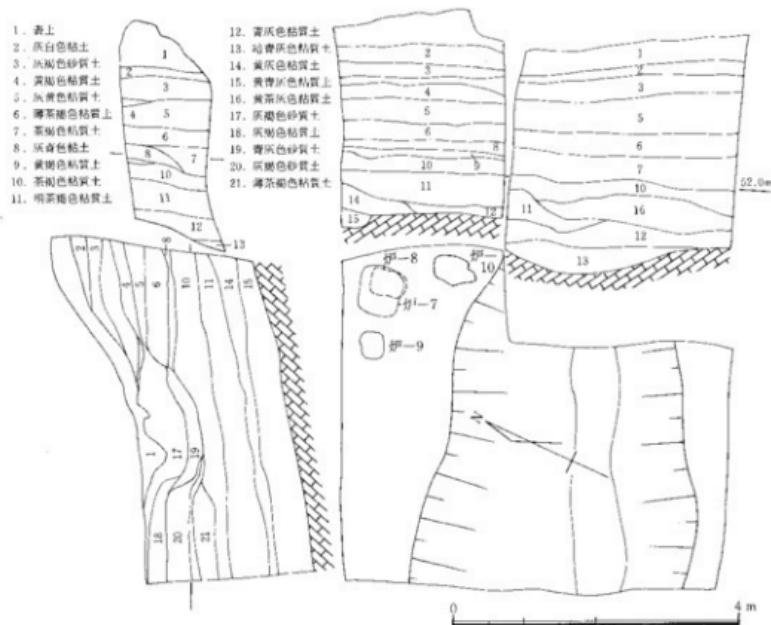


図-19 B-2 トレンチ最終平面図・断面図

る場所に湿氣抜きの為の事前の造構であろう。土壤の埋土は、茶灰褐色砂質土（1層）、灰褐色砂土（2層）、灰褐色砂質土（3層）、灰黒色粘土（4層）である。2層の中には、炭が少し混入していた。4層には、腐食土が混入していた。

工房址の埋土は、主に4層に分かれ、茶灰色砂質土、灰褐色粘質土、灰褐色粘質土（粘性があり炭を多く含む）、灰青色砂質土（床張り層）がある。

B-2 トレンチ

B-1 トレンチと同一戸内内のトレンチで、南へ約5m離れ、A-1 トレンチの直ぐ西側にあたる。規模は、東西方向7.5m、南北方向6.2mである。

基本上層は、表土（1層）、灰白色粘土（2層）、灰褐色砂質土（3層）、灰黄色粘質土（5層）、薄茶褐色粘質土（6層）、茶褐色粘質土（7層）、茶褐色粘質土（10層）、明茶褐色粘質土（11層）、青灰色粘質土（12層）、黄青灰色粘質土（15層）がある。6～7層までが中世以後の堆積土である。10層は、トレンチ全体に堆積し、5～10cm大の礫を多く含んでいる。この上層

には、奈良時代の遺物が少量ながら出土している。

遺構は、鍛冶炉 4 基と A-1 トレンチ南側で検出した大溝の続きの遺構を検出した。各遺構毎に説明を加えていきたい。

炉-7

B-2 トレンチの北東隅で検出した鍛冶炉である。層位は、10層を除去後に11層上面から検出された。規模は、東西方向 0.75m、南北方向 0.55m、深さ約 0.2m を測る隅丸長方形を呈し、断面逆台形の形状を成す。埋土は、黄褐色粘質土である。炉の側底部は、赤茶褐色に焼成を受け、底部に薄い炭層が見られた。上層の焼壁も見られたが少量であった。

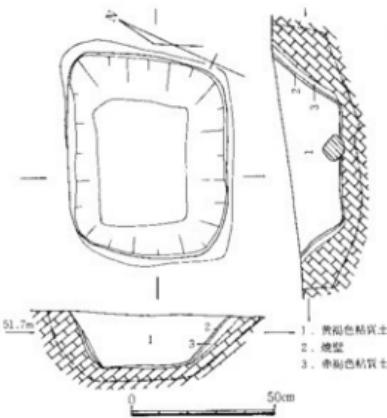


図-20 炉-7

炉-8

B-2 トレンチの北東隅の明茶褐色粘質土除去後に検出した鍛冶炉で、炉-7 と同一場所の下層にみられた。規模は、東西方向 0.4m、南北方向約 0.5m を測る隅丸長方形である。深さは、約 10cm で、底部は、北側に向かう程度がり気味である。埋土は、灰茶色粘質土で少量の炭と 3

~10cm の礫を特に多く含んでいる。下層には、薄く炭が堆積している。焼壁は、赤褐色又は黒茶褐色である。

炉-9

炉-8 と同一土層（同一面）から検出した鍛冶炉である。炉-8 の西側約 0.6m 離れた場所にある。規模は、東西方向 0.38m、南北方向 0.36m を測る。形状は、長軸が炉-8 と 90° 向きが違う東西方向に長い隅丸長方形である。底部は、ほぼ平坦であるが、わずかに西斜している。そのためか西側部分に多くの炭が溜まっていた。埋土は、赤褐色焼土と炭を多く含む黄褐色粘質土である。

底部は、黒茶褐色焼土となっており、東半部の方がよく焼成している。

炉の東側は、緩い斜面地となっており、薄い炭層が広がっている。この炭層中には多くの土器類と鉄滓、轆羽口等が混入していた。

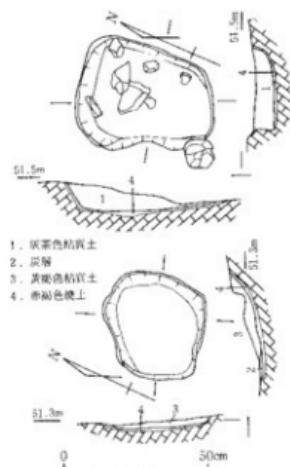


図-21 炉-8、9（上、下）

炉-10

B-2 トレンチ北東部分の炉-7と9の直ぐ南側で大溝の北側肩部に接している。

層位は、炉-8、9が検出された黄灰色粘質土を除去した後、黄青灰色粘質土（15層）である。

規模は、東西方向0.42m、南北方向0.6mの卵丸長方形である。

この炉も長軸が南北方向である。

この炉の底部は、平坦でなく舟底状を成している。南側には、長方形の焼成を受けていない落ち込みがある。底部は炉と同様に丸くなっている。埋土は、緑灰色粘質土、炭層、茶褐色焼土、炭層がある。茶褐色焼土は、割合多くの量がある。

大溝-1

B-2 トレンチの南側の大部分を占め、東西方向の大溝である。A-1 トレンチにその一部が検出されており、その続きである。層位は、11層の下層にあたる。埋土は、青灰色粘質土（12層）、暗青灰色粘質土（13層）がある。12層は、2~5cm位の小疊と10~50cm位の大疊が非常に多く混入しており、石敷き遺構が崩れたものと考えられる。A-1 トレンチでもみられた石列が溝の肩部にも約1m弱検出された。石の入り方は、溝の北側部分に集中している。13層は、上層より疊の入る量が少なく、疊の大きさも約5cm前後のものが多い。この層には、炭の混入も多かった。

遺物は、土師器、須恵器の他に、鉄鋤、輪羽口、砥石、埴輪、鉄鎌等がある。

その他の遺構

炉-7の検出面に数個のピットを検出した。ピットの規模は、30~40cm前後の小さなものである。調査区が狭いため、どのような性格のものか明らかでない。しかし、炉の向きや大溝-1の方向と同じ方向のピット列があり、この炉に付設する建物の可能性が強い。ピット間隔は1.3mを測る。

5層の除去後に50~70cm位の石が数個南北方向に遺存していた。これは、旧烟の畦を作る為の石垣の根石と考えられる。畦の方向とはほぼ平行し、新しい時期の石列である。

B-3 トレンチ

B-2 トレンチの南側へ3mの場所に設定したトレンチで、東西方向1.5m、南北方向9mの大きさである。

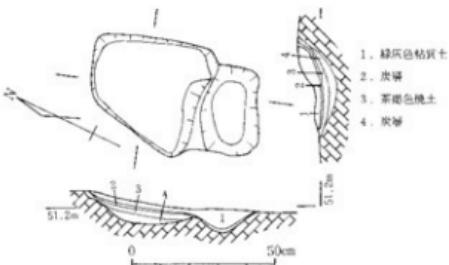


図-22 炉-10

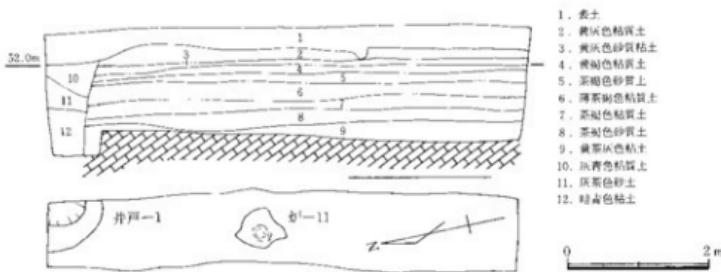


図-23 B-3 トレンチ平面図・断面図

基本上層は、表土（1層）、黄灰色粘質土（2層）、黄褐色粘質土（4層）、茶褐色砂質土（5層）、薄茶褐色粘質土（6層）、茶褐色粘質土（7層）、茶褐色砂質土（8層）、黄茶灰褐色粘土（9層）である。8層には、炭が多く混入しており、B-2 トレンチの炉の周辺土層とよく似ている。

遺構は、8面上面で溝とピットを、9層上面で炉1基とトレンチ北側隅に井戸-1を検出した。

井戸-1

トレンチ北側隅で井戸の一部を検出した。完全に埋まっていいるが、近世以降の新しい井戸であろう。この井戸も、大溝-1と同じく生駒山地からの湧水を利用したものであろう。

溝-1

トレンチ中央部から7層除去後に検出した東西方向の溝である。溝幅約50cmを測り、掘力断面は浅い弧状を呈する。埋土は、黒茶褐色粘質土である。遺物は、上師器の綱片が出土した。

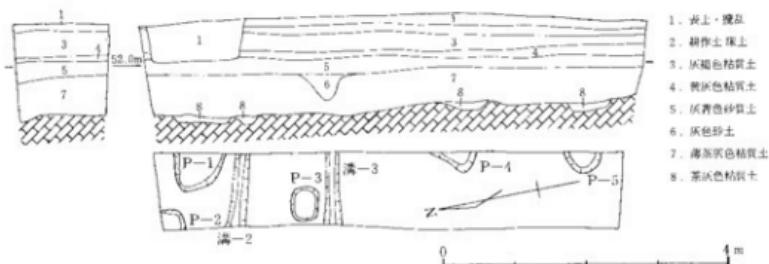


図-25 B-4 トレンチ平面図・断面図



図-24 井戸-11

ピット

溝-1と同一面で5ヶのピットを検出した。ピットの大きさは、20~40cmの円形ピットである。恐らく鍛冶関係工人の住居を構成するピットであろう。

炉-11

トレンチの中央部の9層上面に検出した炉である。この炉は、地下を掘削した炉ではなく、平坦面上に炉床が拡がる形態のものである。規模は、東西方向0.25m、南北方向0.3mの範囲で強く焼成を受けた面があり、その囲り約0.5mが熱影響を受けている。炉床部は、赤茶褐色で堅固である。

B-4 トレンチ

B-3 トレンチのさらに南側2.5m離れた場所に設定したトレンチである。規模は、東西方向2.5m、南北方向9.0mである。基本土層は、表土（1層）、灰褐色粘質土（3層）、黄灰色粘質土（4層）、灰青色砂質土（5層）、薄茶灰色粘質土（7層）である。

遺構は、7層上面で溝1本と7層掘削後溝1本とピット数個を検出した。

溝-2

トレンチ北側部にある東西方向の溝である。横幅0.2m、深さ約0.1mを測る。埋土は、茶灰色粘質土である。

溝-3

トレンチ中央部上層遺構である。東西方向の溝で、横幅0.8m、深さ0.35mを測る。掘方断面V字形を成す。埋土は、灰色砂土である。

ピット

トレンチ内から5ヶのピットを検出した。ほとんどが全形を知り得ず規模も明らかでない。形状は、円形又は隅丸方形と考えられる。

B-1 トレンチ出土遺物

B-1 トレンチ出土遺物は、土師器、須恵器、輪羽口、埴輪、鉄滓、磁石等が出土した。

須恵器は、杯、壺、甕等がある。

杯蓋（66~72）は、擬宝珠様つまみを持つ形態のものである。66は、炉-6の下層の灰褐色粘質土から出土した。遺存度は約1/3で、つまみ部分が欠損する。口径9.5cmを測り、内面にはやや細かいえりが付く。天井部は、回転ヘラ削りを行う。色調は、灰青色を呈し、胎土は、精良である。67は、炉-2の下層の灰褐色粘質土中から出土した。口径9.7cmを測る。これも擬宝珠様つまみが付く形態のもので、内面にえりが付く。68は、炉-6の周辺部の灰褐色粘質土中から出土した。口径10.3cmを測る。えりの部分が、66と67より短く先端が下向きでなく

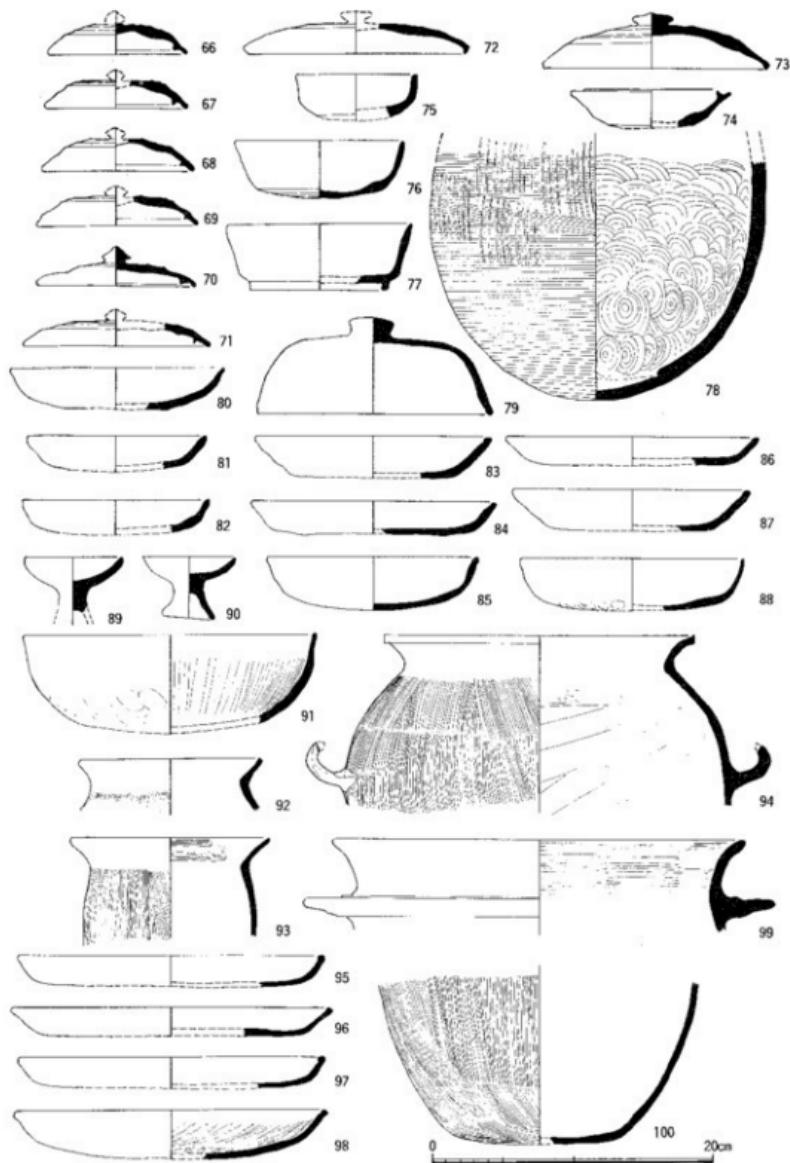


図-26 B-1 トレンチ出土遺物

内方を向く。69は、炉-5の下層遺構の円形土壙から出土した。口径11.0cmを測り、全体にやや扁平な形を呈する。70は、工房址の下層埋土の灰褐色粘質土中から出土した。口径10.8cmを測り完形に近い。つまみは遺存しており、やや高いものである。かえりは、口縁部よりわずかに内側にある。71は、工房址の上層の黄灰色粘質土中から出土した。この土層は、炉-1の下層である。72は、工房址の南側の炭層中から出土した。炉-1と同一時期と考えられる炭層である。口径15.4cmを測り、内面にかえりを有しない。天井部は、回転ヘラ削りを行わずに回転ナデ調整である。73は、工房址の灰褐色粘質土から出土した。ほぼ完形である。天井部中央に偏平なつまみを付け、口縁部内側にはかえりがなく、端部は小さく下方に屈曲するものである。

杯身（74～77）は、かえりの有するものと有しないものがある。74は、かえりが短く上方に伸びるもので、口径9.4cmを測る小型の杯である。底部は、回転ヘラ切り未調整で、「一」のヘラ記号を持つ。

75は、工房址周辺部の遺物包含層から出土した。かえりがなく逆台形状の形態の杯である。高台がなく、底部は、回転ヘラ削り調整である。胎土は密であるが、白色砂粒を多く含む。76は、炉-1下層黄灰色粘質土中から出土した。口径12.0cm、器高4.1cmを測る。内面に溶融鉄の付着がみられる。底部は、回転ヘラ削りである。仕上げはやや雑な作りである。77は、高台の付く杯で、口径13.1cm、器高4.6cmを測る。高台は、やや小さく断面方形を呈す。

78は、工房址の灰褐色粘質土中から出土した壺の体部である。最大径24.0cmを測る球形の体部を持ち、外面は、カキ目後部分的に平行叩きを施し、内面は、同心円文叩きである。

土師器は、杯、高杯、椀、甕、鉢、皿、土釜等がある。

杯蓋（79）は、工房址の灰褐色粘質土中から出土した。口径16.4cm、器高6.9cmを測るつまみの付く丸味のある蓋である。口縁端部は、短く外反後内湾気味に肥厚し、内面に折り込むような沈線がみられる。内外面ナデ調整である。胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含んでいるが、精良である。色調は、明茶褐色を呈する。

杯身（80～88）は、工房址埋土の上下層から出土した。全体に偏平な感じのものが多く、口径が、12.4、13.0cmの小さいものと14.8～19.2cmの大きいものに別れる。前者は、口縁端部が尖り気味に終わる。後者は、また、口縁端部が内側に肥厚して終わるものと先細りの短く外反後わずかに内側へ折り曲げるものの2者に分かれる。調整のわからないものもあるが、ほとんど内外面はナデ調整である。88の底部は、指押さえ調整である。

89、90は、小型手捏高杯である。89は、口径6.3cm、器高4.4cmを測る。88も同様の大きさである。調整は、ナデ調整である。

椀（91）は、炉-1の下層黄灰色粘質土中から出土した。口径20.5cm、器高7.0cmを測り、口縁部は先細りで丸く終わる。内面には放射状の暗文がみられ、底部は、指押えがある。

壺（92、93）は、炉-1の下層と石敷遺構の下層から出土した。口縁部は、体部からくの字

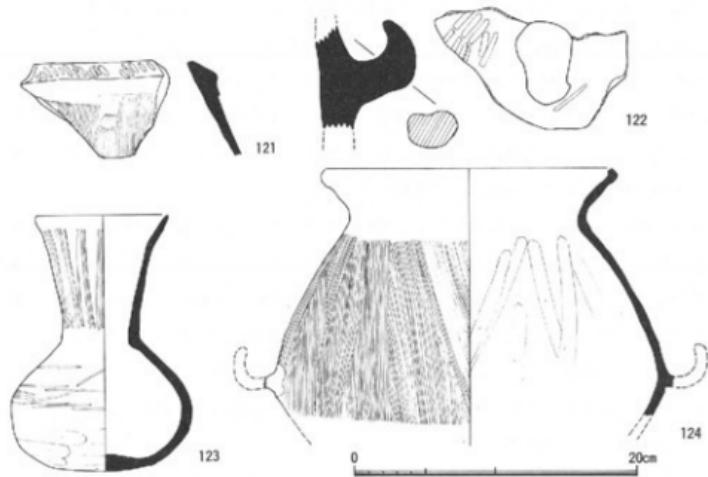
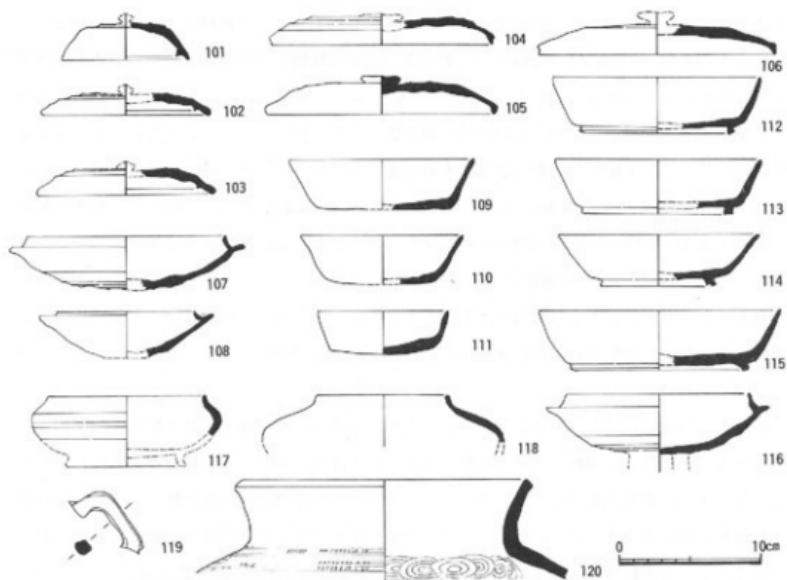


図-27 B-2 トレンチ出土遺物

形に屈曲して外上方に伸びる。体部外面は、ハケ目調整で、内面は、ナデ又はハケ目調整である。

鉢（94）は、炉一1下層から出土した。1対の平たい把手を持ち、円形の体部を持つ。口縁部は大きく外反後上方につまみ上げた様な端部を成す。内外面をハケ目調整を行う。外面は縦方向で、内面は横方向である。

皿（95～98）は、工房跡の上下層から出土した。杯の後者と同一の内側へ肥厚する端部を持つ。98は、内面に放射状の暗文を持ち、他のものにはみあたらない。96、98の底部は、軽いヘラ削りがみられる。99、100は、工房跡の上層から出土した土釜である。恐らく同一個体であろう。口縁部は、緩く外反し、鈍は水平にやや短く伸びる。体部から底部にかけては、外面をハケ目、内面をナデ調整を行う。胎土は、石英、長石、金雲母を含み砂粒が多い。色調は、茶褐色を呈し、生駒西麓産のものである。

B-2 トレンチ出土遺物（図-27、28）

B-2 トレンチ出土遺物は、須恵器、土師器、埴輪、輪羽口、鉄滓、鉄製品等が出土した。

須恵器は、杯蓋身が主なもので、高杯、壺、壺、半瓶の把手等がある。

杯蓋（101～106）は、擬宝珠様つまみを付し、内側に比較的短いかえりを持つものと持たないものがある。101は、大溝の埋土上層の青灰色粘質土中から出土した。天井部はやや高くつまみを欠損する。口径9.0cmと小さい。102は、大溝上層の黄茶灰色粘質土中から出土した。口径11.6cmを測り扁平な天井部を持つが、口縁部内側には小さく形骸化したかえりが付いている。天井部は、回転ヘラ削りを行う。103は、大溝埋土の青灰色粘質土中から出土した。口径12.4cmを測り、つまみを欠損しているが、器高の低い偏平な杯蓋である。これも内側に小さなかえりが付く。104は、大溝上層から出土した。口径15.7cmを測り、中央部に扁平な擬宝珠様のつまみの付く形態のものである。口縁部内側には全くかえりがなく、端部を内方へ小さく屈曲させる。天井部は、回転ヘラ削りを行う。全体に自然釉が剥いでいる。

105は、大溝上層から出土した。口径16.1cmを測り、天井中央部に偏平なつまみが付く。天井部は低いがやや丸い感じとなっている。106は、黄茶灰色粘質土中から出土した。口径16.6cmと最も大きく新しい要素持つ蓋である。

杯身（107～115）は、たちあがりの持つものと底部が平底で口縁部が直立的にたちあがるもの、さらに高台の付くものの3形態がある。107は、大溝上層から出土した。口径14.1cmを測り、たちあがりが上方に短く伸び、受部より少し高い杯である。底部は、回転ヘラ削りを行う。B-2 トレンチ出土遺物の中で最も古い要素を持っている。108は、黄灰色粘質土中から出土した。口径9.8cm、器高3.3cmを測る。たちあがりは、短く内傾し、受部とはほぼ同じ高さである。底部は、平坦面が少なく安定の悪いものである。109は、黄灰色粘質土中から出土した。底部

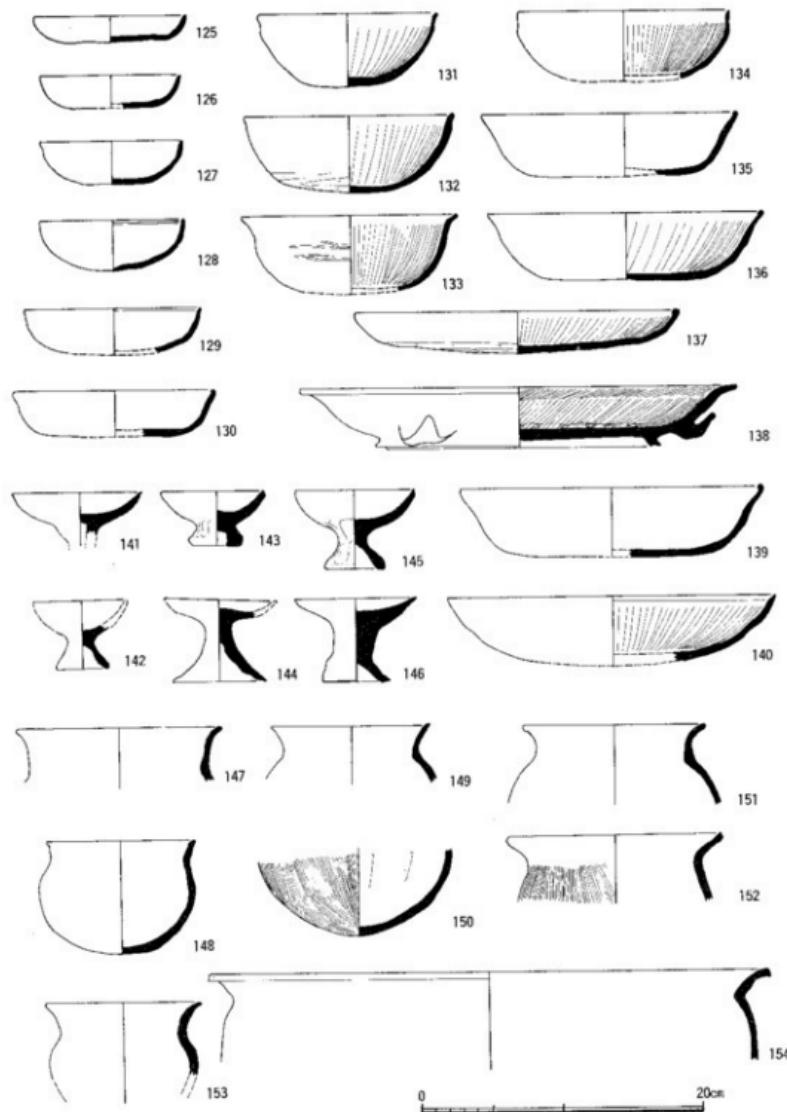


図-28 B-2 トレンチ出土遺物

は、平底で、口縁部は真直ぐ外上方にたちあがる。口径13.0cm、器高3.6cmを測る。110も同一土層から出土した。口径11.4cm、器高3.5cmを測る。底部は、回転ヘラ削りである。111は、青灰色粘質土中から出土した。口径9.2cm、器高3.0cmを測る小型の杯である。底部は、回転ヘラ切りである。112は、青灰色粘質土中から出土した。高台は、小さく外方にふんばる。113は、黄灰色粘質土中から出土した。高台は、しっかりしたもので全体に器壁も厚いものである。114は、青灰色粘質土、115は、黄茶灰色粘質土から出土した。

116は、明茶褐色粘質土から出土した高杯の杯部である。立ちあがりはやや長く、脚部は、3方透かしである。口径12.8cmを測る。

117は、青灰色粘質土中から出土した短頸壺である。口縁部は短く直立し、端部は平坦に終わる。口径11.0cmと小型に属する。肩部より下方は、回転ヘラ削りを施す。118も同一土層から出土した短頸壺である。口径9.2cmを測る。口縁端部は丸く終わる。

119は、平瓶の把手である。この大きさからして小型のものであろう。120も上層包含層から出土した。口縁端部は内外面に肥厚する要で、外面は、平行叩きとカキ目調整、内面は同心円文叩きである。

土師器は、杯、碗、皿、盤、小型手捏高杯、壺、甕、移動式甕等がある。

杯は、大溝の埋土及び黄茶灰色粘質土から、口径が10.0~14.2cmを測り、器高の低く偏平な杯（125~130）と口径が12.6~19.3cmと大きく底の深い杯（131~136）がある。前者の口縁部は、真直ぐ伸びて尖るもの（125~127）、内面に肥厚して沈線状の段を持つ（128）もの、内傾する段を持つもの（129）がある。これらは、外面ナデ調整で暗文はみられない。後者は、口縁端部が短く外反するもの（131~134）と内側に肥厚するもの（135、136）がある。135以外内面に放射状の暗文を持つ。132の底部はヘラ削り調整である。133は、体部外面に横方向のヘラ磨きがみられる。

137は、青灰色粘質土中から出土した皿である。口径22.3cmを測り、底部はヘラ削り調整で内面には放射状の暗文を施す。

138は、青灰色粘質土中から出土した盤である。3方に把手が付き、口縁部は水平方向に伸び、高台は低く内端面で接地する。内面は、2段の放射とラセン暗文があり、底部にも格子目状の暗文を付ける。139は、青灰色粘質土から出土した碗である。口縁端部は内側に折り曲げたもので内面に暗文がない。140も同層から出土した碗である。口縁端部は、内傾する段を持つ。内面には放射状の暗文がある。

小型手捏高杯（141~146）は、主に青灰色粘質土中から出土した。145のみ黄茶灰色粘質土からである。これらの高杯の胎上は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含み、色調は、明茶灰色系統である。

甕（147~154）は、主に青灰色粘質土から出土した。口縁部はわずかに外反する（147~149、

153) のものと外反後内弯気味に終わるもの（152）がある。内外面ナデ調整のものが多いが、150、152は、内面を板ナデ調整、外面をハケ目調整している。胎土は、石英、長石、金雲母を含み、色調は、茶褐色系統の当地域産のものである。

121～124は、青灰色粘質土から出土した。121は、移動式窓の眉庇部分で口縁端部外斜面に同心円文叩きを施している。122は、外面に大きな平行叩きがみられる。123は、ほぼ完形の長頸壺である。

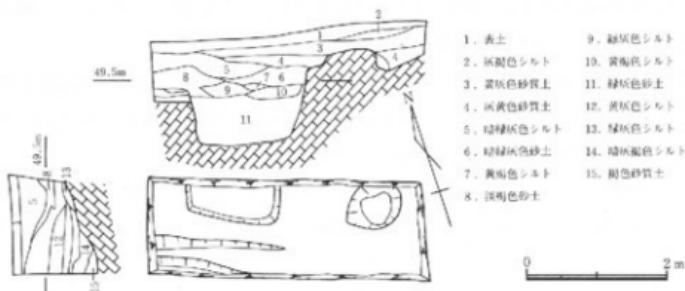


図-29 C-1 トレンチ平面図・断面図

第4節 C区の調査

C-1 トレンチは、B-1 トレンチの西側にあたり、一段下の畑内である。規模は、東西方約5.0m、南北方向1.5mのトレンチである。基本土層は、表土（1層）、黄灰色砂質土（3層）、暗緑灰色シルト（5層）である。北側が急な崖であり、その落下した土砂の堆積土である。遺構、遺物は検出されなかった。土壤、ピット状の遺構は、近世以降の擾乱孔である。

第5節 その他の遺物

今回の調査区では、土師器、須恵器の土器類の他に、埴輪、櫛羽口、鉄鋤、鉄器、砥石等がある。各トレンチの出土遺物をあわせて記述してみたい。

埴輪

埴輪は、A-1、B-1、2 トレンチから出土した。各トレンチから出土した埴輪は、量的に多くない。直ぐ北側の丘陵上又は、A-2、3 トレンチのある場所に古墳が存在して、そこから転落したものと考えられる。

155は、B-1 トレンチの上層土層から出土した。円筒埴輪の破片である。凸帯は、くずれた台形を成しあまり高くない。外面は、荒い繊ハケ目がある。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、茶灰色を呈す。焼成は良好である。仕上げは、やや雑な感じである。156は、

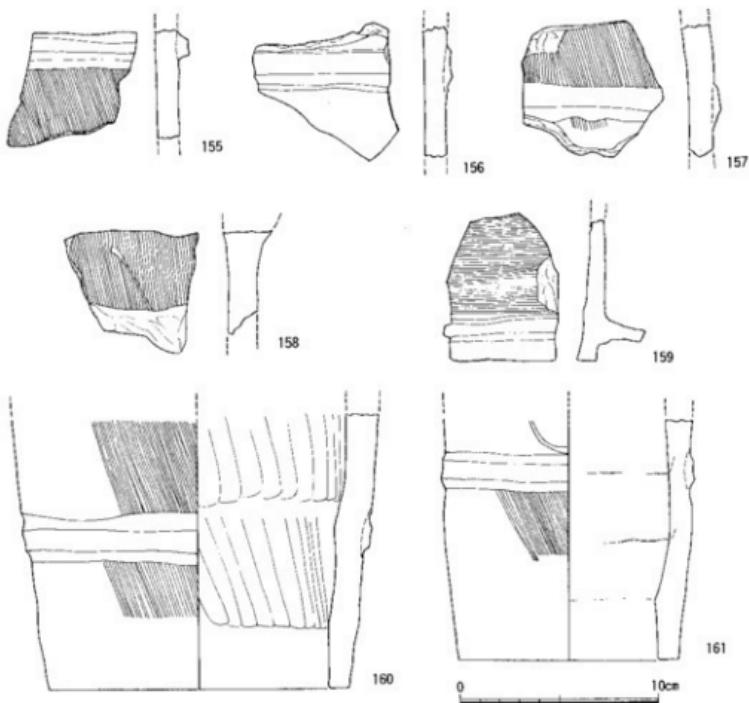


図-30 墓 輪

A-1 トレンチの上層土層から出土した。155よりさらに扁平な凸帯を付し、外面は、ナデ調整でハケ目がみられない。色調は、明茶褐色で、焼成は、須恵質である。円筒埴輪の破片と思われるが、やや器形が変形している。157は、A-1 トレンチの黄灰色粘土中から出土した。この土層は、奈良時代の遺物包含層であり、既にこの時期から埴輪の転落があったのだろう。凸帯は、低い断面三角形を成し、外面に縦ハケ目を施している。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、茶灰色を呈する。焼成は、上部質で良好である。作りは、雑なものである。

158は、B-2 トレンチの下層土層から出土した。形象埴輪の破片で、外面は、ハケ目を施し、ヘラ記号がみられる。一端は肥厚して直角に交わる部分の破片と思われる。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、明茶灰色を呈す。159は、B-1 トレンチ炉-5の掘方埋土中から出土した小型の形象埴輪の破片である。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、茶灰色を呈す。外面は、横ハケ目で、内面は、縦ハケ目である。ミニチュアの家型埴輪の最下

段部分の埴輪か。160は、B-2トレンチ石敷遺構の下層から出土した円筒埴輪の底部の破片である。底径は、15.1cmを測る。底部から7cmのところに扁平な凸帯を付け、その上段には円孔がある。調整は、外面は縦ハケ目で、内面は、下方からナデ上げている。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、茶灰色を呈す。焼成は良好である。161は、B-2トレンチ大構の埋土中から出土した円筒埴輪の基底部である。底径11.1cmを測る小型のものである。底部から8.5cmの位置に不整台形の扁平な凸帯が付く。調整は、外面は縦ハケ目で、内面はナデ調整である。内面には、3~3.5cmの粘土帶の痕跡が観察できる。胎土は、石英、長石、くさり礫を含み、色調は、茶灰色である。

轆羽口

轆羽口は、製鉄関係で使用する送風装置である。破片を含め十数片出土した。出土地点は、A-1、B-1、2トレンチである。図示した遺物は全部B-2トレンチからの出土である。末端部分が例外なく壊れている為全長は不明であるが、現存長7~8cmを測る。体部外径は、

No.	現存長	体部外径	体部内径	先端長	壁の厚さ	胎土	色調	備考
162	7.2	4.2~4.9	1.9~2.2	—	1.0以上	生駒西麓産	茶褐色	断面丸形
163	7.4	4.2~4.7	1.9	2.2	1.7~3.2	〃	〃	〃
164	8.2	3.7~4.2	1.7	3.2	1.2	〃	〃	断面8角形
165	7.7	4.5~4.7	2.1	1.1	1.3~1.6	〃	〃	断面丸形

表-2 轆羽口比較表

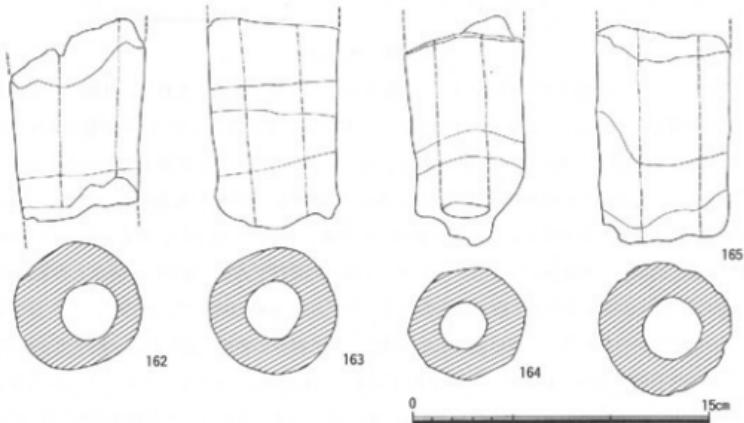


図-31 轆羽口

3.7~4.9cmを測る。大県、大県南遺跡から出土する輪羽口（6~7世紀代に属するもの）と比較してやや小型である。内径についても同様である。先端部は、溶融金属の付着している部分で炉の内側に突出した長さにあたる。壁の厚さは、先端と末端との間の熱影響によって色調変化した部分の幅である。炉の稼働時間、上昇温度の差異等により変化する可能性を持つが、炉壁との関わりが強く1つの目安となると思われる。胎土は、石英、長石、金雲母等の砂粒を多く含む当地域の粘土（生駒西麓産）を使用している。色調は、茶褐色、青灰色（炉の厚さ部分）を呈す。外面には縦方向の叩き跡がみられるものもあり、外側8角形を成すものもある。

鉄滓

鉄滓は、A-1、B-1、2トレンチから総重量11.17kgが出土した。ほとんどの鉄滓が破損しており、全形を知る資料が少ない。最大のものは、長径14.0cm、短径9.0cm、厚さ4.0cm、重量600gを測る。500g以上のものが1ヶ、400g以上3ヶ、300g以上2ヶ、200g以上2ヶ、100g以上4ヶで大半のものが100g以下の小破片が多い。形態は、破損しているものが多く不明であるが、各個自形を成し、大きな破片のものは、楕円形を呈するものが多い。成分は、科学結果を待たねばならないが、当地域で出土する鍛冶滓と視覚的には同様である。

鉄鎌

B-2トレンチ大溝下層の暗青灰色粘質土中から1点出土した。刃先を下方に屈曲させた曲刃鎌である。全長約11cm、刃幅3.0cmを測る。基部は、小さく折り曲げてかえりとする。

砥石

砥石は、3点出土した。167は、流紋岩質で端部のみである。7面以上の中凹面を持つ。168は、粘板岩製の溝の持つ砥石である。砥石面は表面2面を持つ。

169は、砂岩質のやや大きな砥石で中程で折損している。砥石面は8面あり、内2面には米粒大的傷が多数見られる。

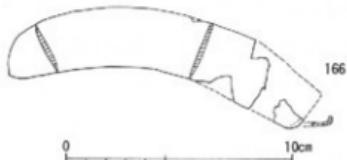


図-32 鉄鎌

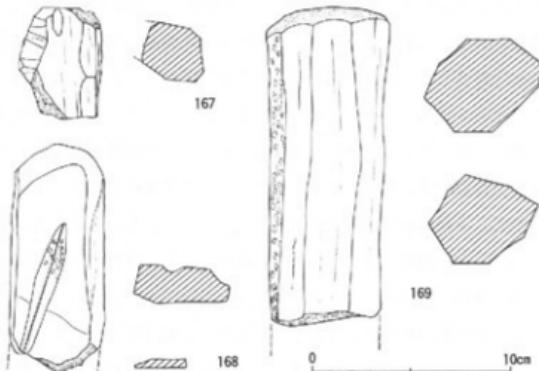


図-33 砥石

第4章 まとめ

今回の調査区は、平尾山古墳群の太平寺・安堂支群の最西部に位置し、生駒山地の西麓部の太平寺遺跡と接する丘陵中腹部にあたる。農業用道路建設に伴う事前の調査で4ヶ年計画の初年度として実施した。結果は、Ⅲ期に分かれる遺構と遺物を検出した。各期について若干の説明を加えたい。

I期（古墳時代後期）

この時期は、遺物のみで遺構は検出されなかった。遺物は、埴輪のみである。埴輪の出土場所は、東西方向に伸びる2つの尾根に挟まれた谷間からである。いずれかの尾根上に古墳が存在し、転落したものであろう。時期は、形態や調整方法から5世紀後半から6世紀前半までのものである。太平寺支群や安堂支群の丘陵尾根筋に同時期の古墳が多数存在する。中心主体は木棺直葬が主で円筒埴輪と形象埴輪（人、家、馬、蓋等）を持つ小規模古墳である。今回の調査区は、これらの埴輪の持つ尾根の最北端に位置する。以北の丘陵は、急峻な斜面が多いため埴輪を巡らす古墳の築造が立地的に困難であると考えられる。II期（飛鳥時代）に属する遺構及び遺物包含層から円筒埴輪の基底部が多く出土しており、この時期になると既に古墳の崩壊が顕著に進んでいたことがわかる。

II期（飛鳥時代）

遺構は、10基の炉と溝、竪穴工房、ピット群がある。とりわけ狭い調査面積の中で10基もの炉が検出されたことは特異である。炉の性格は、共伴して出土する遺物（鉄鋤、繩羽口、砥石、焼壁、炭屑、石製金床台等）から鍛冶生産に関連した事が明確であろう。炉の形態は、3つに大別される。1つ目は、隅丸方形の平底炉である。この形態に属する炉は、B-1 トレンチの炉-1、5、B-2 トレンチの炉-1、2、3、4である。規模は、若干の差異がある。時期変遷は、B-2 トレンチ炉-4が最も古く、7世紀前半。同炉-2、3とB-1 トレンチ炉-5が7世紀中葉、B-1 トレンチ炉-1が7世紀後半、B-2 トレンチ炉-1が8世紀初頭にあたる。下層の炉ほど破壊が進んでいるのは、活発な生産活動が繰り返し行われているためであろう。炉の側壁は、黒褐色又は赤褐色を呈し、外側に開き気味に終わる。炉底部も燃焼を受け炭が堆積していることが多い。

2つ目の炉の形態は、平面が円形を成し、底部は丸底である。B-1 トレンチ炉-4、6である。炉の側壁及び底部は、粘土が厚く貼り付けられて炉の稼働によって緑灰色又は青灰色になる程よく焼成を受けている。炉-6の壁は、粘土を何回も貼り付けた痕跡がみられる。これ

は、炉の構造を示すものか補修又は造り変えの為か明確でない。この炉は、堅穴工房の中心部にあり、炉-4よりも規模が大きく時期的にも長く使用されている。炉の性格を示すものとして、炉底部の堆積に鉄滓ではなく炭が厚く溜まっていた。時期は、7世紀中葉である。3つ目の炉の形態は、平面的な焼土面を持つものである。I及びII型式に当たらない。時期は、B-1トレンチ炉-2は、7世紀後半、B-3トレンチ炉-1は、8世紀前半である。

炉の方向は、東西又は南北方向を向き斜面に対して直角である。これは、炭のかき出しや作業姿勢が容易にとれる事からごく自然の向きであろう。B-2トレンチ炉-3は、南西方向に炭をかき出した痕跡がみられる。B-2トレンチ炉-4は、南側に窓み穴がみられ炉の使用方法と深い関係が看取される。B-1トレンチ炉-4の下層から土壤が検出された。炉は、堅穴工房の中でも標高のやや高い湿気の少ない場所に位置している。さらに土壤を掘削し湿気抜きの為の施設としたと考えられる。土壤埋土は、砂質土系統の土砂で埋められていた。

B-1トレンチの堅穴工房は、柱穴と考えられるピットが検出されており、炉の上部をおおうための屋根が存在した可能性が強い。B-2トレンチの炉周辺部に多くのピットが存在し、規模が明確でないが掘立柱建物が想定され、大溝の位置や地形を考慮した場合、炉が屋内に構築され稼働していた事が考えられる。鉄滓の出土量や生活に使用した土器や須恵器も多く出土している事から一過性の工房址ではなく長期間にわたり継続して稼働していたと考えられる。

金床台と考えられる石列遺構は、堅穴工房に南接し、堅穴端部の石列に接続して数個の上面が平坦な石が設置されていた。この石の表面は、熱影響を受けており、砥石面のように平滑になっている。これは、何回もの強い打撃によって出来た結果であると考えられる。石は、安山岩製で非常に堅固である。

鍛冶によってどのような鉄製品を作ったのかは問題となるところである。B-2トレンチの大溝-1より鉄鎌が出土した。鍛冶による製品であるのか日常鉄器が廃棄されたものか明確でないが、鉄滓や櫛羽口と共に併せて出土している事から鍛冶生産に関係した鉄器である可能性が強い。

当調査区の位置及び時期的環境は、河内六大寺の山下寺及び知識寺に隣接し、山下寺から南側へ約200m、知識寺から東側へ約100mの距離を隔てている。山下寺とは、ほぼ同じ標高であるが、知識寺に対しては眼下に見下ろす位置である。当調査区の炉が構築され始めたのが、両寺院が創建された時期と大きな差異がなく、工房の稼働時

型式	トレンチ	名 称	7 c 前半	7 c 中頃	7 c 後半	8 c 前半
I a	B-1	炉-5		■		
	B-2	炉-8		■		
	B-2	炉-9		■		
	B-2	炉-10	■			
	B-1	炉-1			■	
I b	B-2	炉-7				■
II a	B-1	炉-4		■		
	B-1	炉-6		■		
III a	B-1	炉-2			■	
	B-3	炉-11				■

表-3 炉の変遷

期と寺院の最盛期とがほぼ合致している。これらの事から、いずれかの寺院と強い関わりを持つと考えられる。また、検出した炉や出土遺物の鉄滓や鷲羽口の規模や法量は周辺部の調査で検出する集落遺跡のそれらとはやや縮小した計測値を得ており、差異がみられる。

Ⅲ期（中世）

遺構は、A-1 トレンチから検出した土器棺墓と B-1 トレンチから炉 1 基を検出した。土器棺墓は、5 ヶの土釜を組合せ、その中に上部器大小皿と銅錢、鐵器等が納められていた。1 ヶの土釜を土器棺として使用した発見例はあるが、このような形態は極めて珍しいものである。土釜内の遺物の構成や数量は、当時の祭祀の度衡を知る上で重要な指標となるものだろう。土釜や土器大小皿は、使用痕はなく祭祀用として供したものである。当調査区の西側山麓の平野部にはこの時期の遺構や遺物が多数検出されており、今後この平野部の遺跡とどのような関わりがあるか問題となるだろう。

炉は、土器棺墓の直ぐ西側下方から検出した。このような形態の炉は、玉手山遺跡の中世期の集落内から検出されており、細部は若干の相異がみられるものの規模や構造が極めて類似している。両方の炉共に炉底には炭が多量に堆積し、炉壁が強い燃焼を受けている。用途は、出土遺物がなく明確に出来なかった。

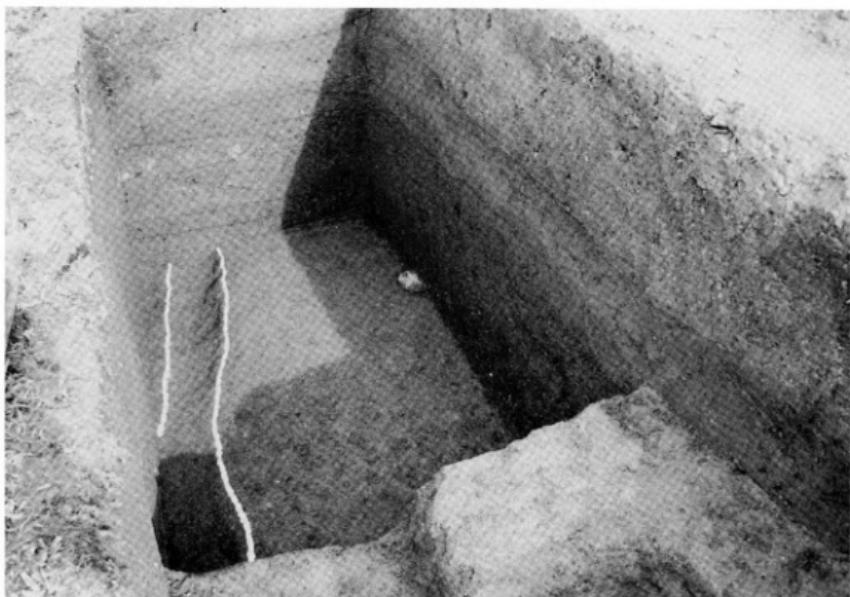
図 版



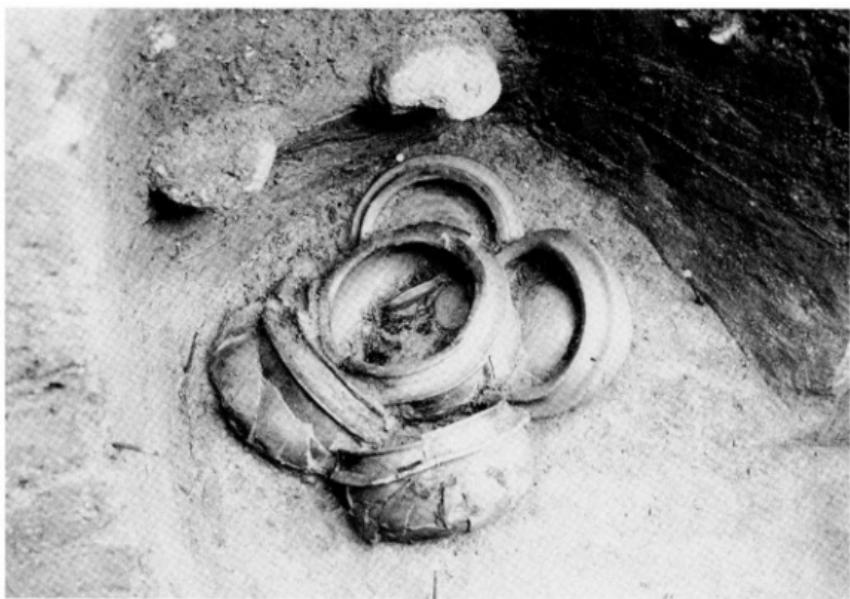
北側から



南側から



上層遺構



土器棺墓



溝1上層



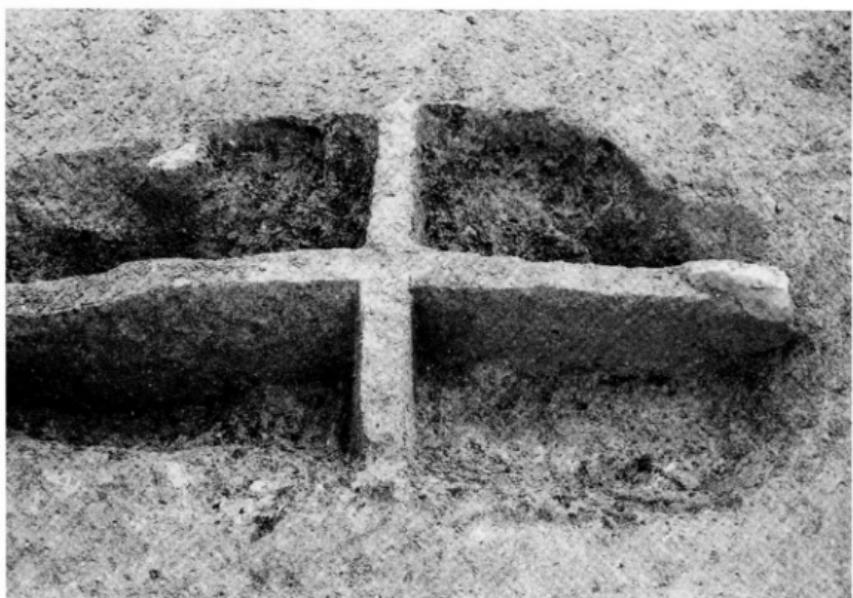
溝1下層



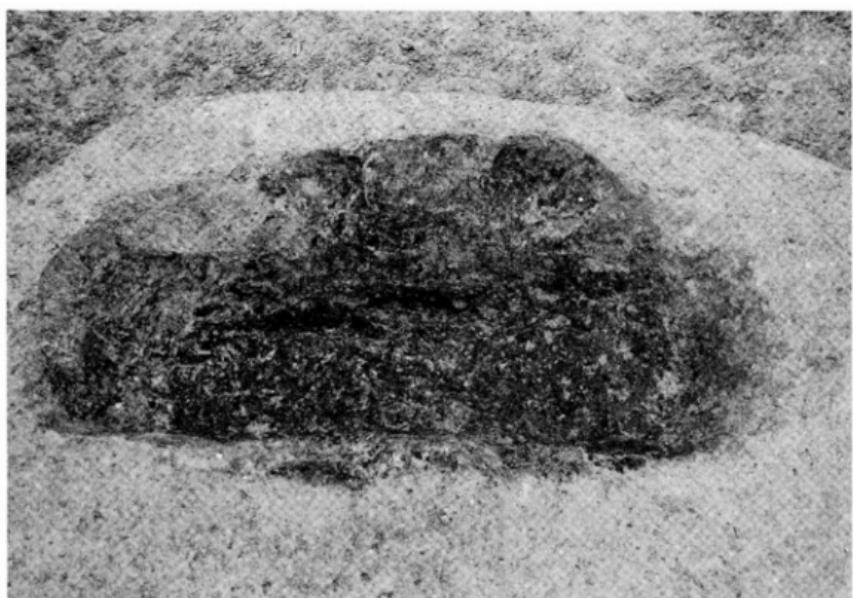
A 2 トレンチ全景



A 2 トレンチ断面



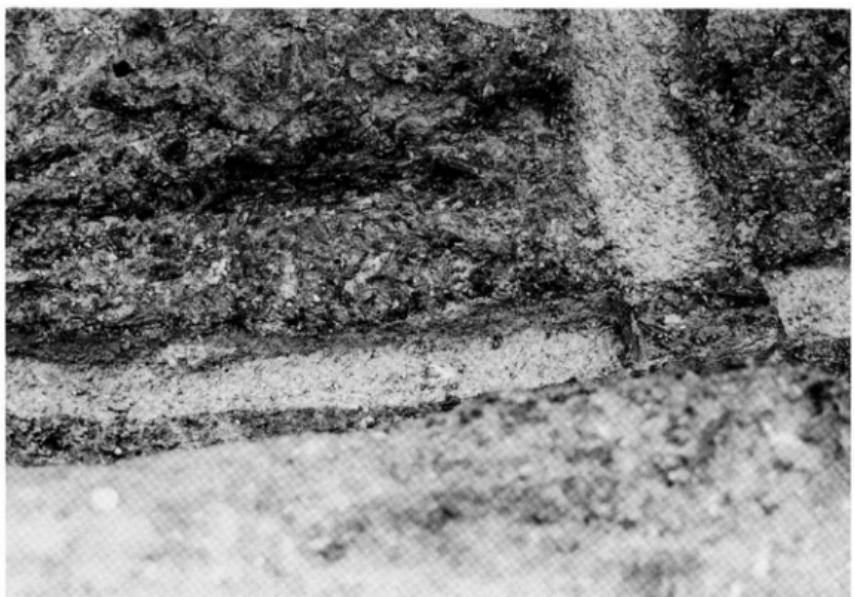
炉3埋土



炉3全景

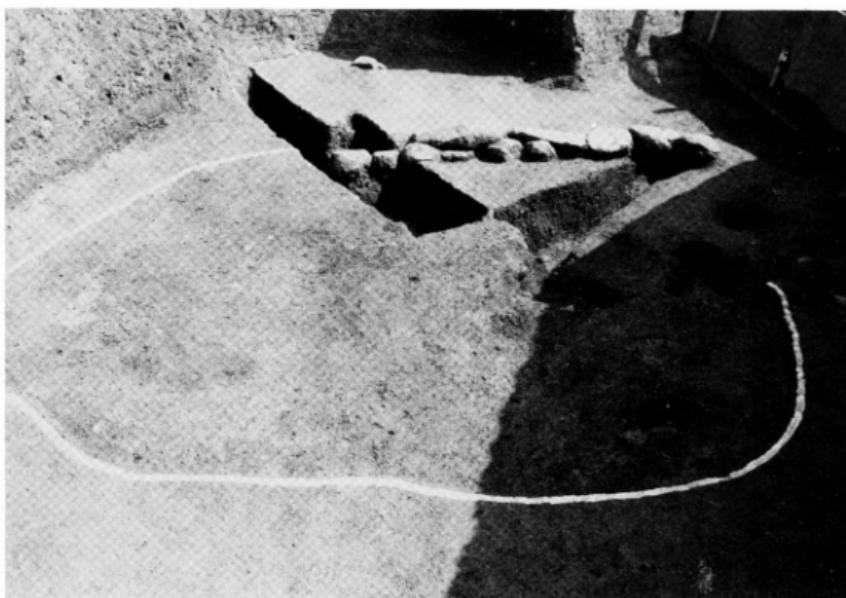


炉3立割全景

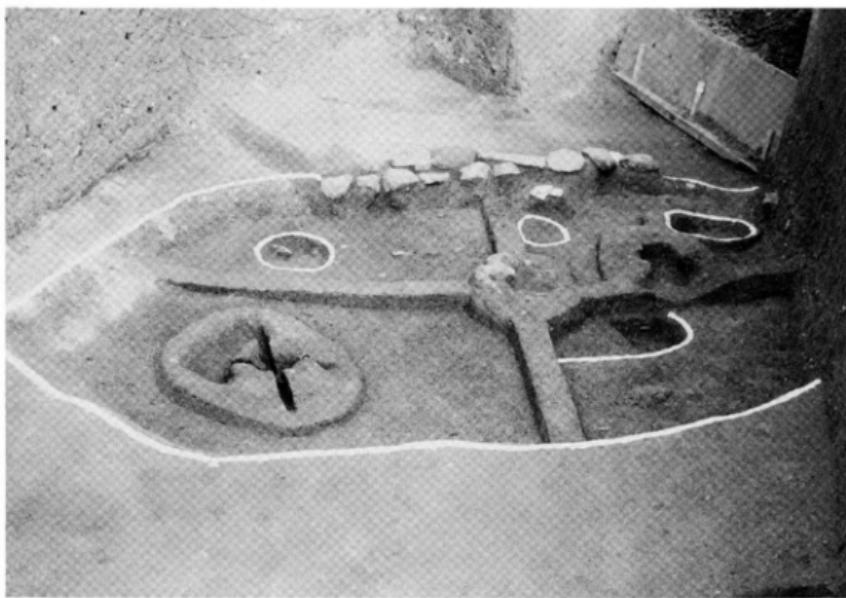


炉3床立割断面

図版七
B 一トレンチ豎穴工房

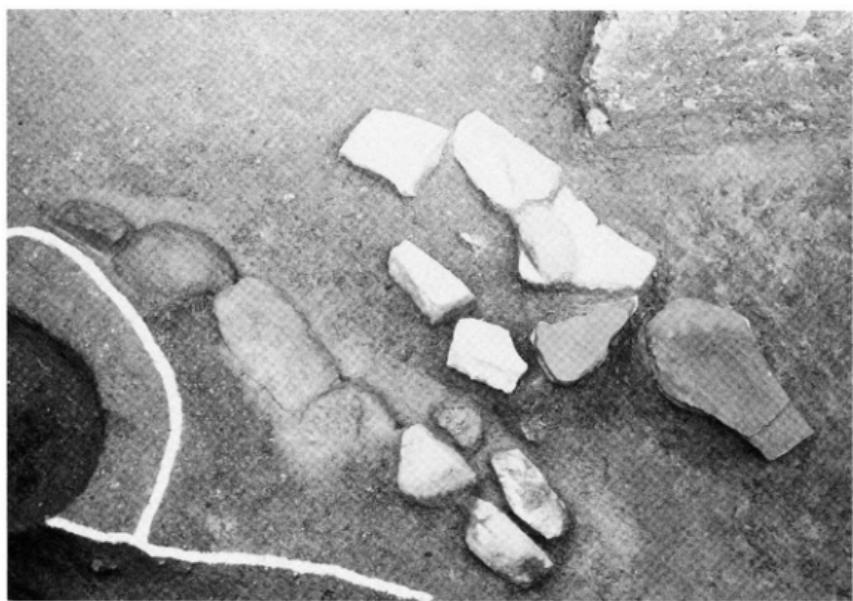


検出状況



検出状況

図版八 B 一トレンチ石敷・石列遺構



石敷



石列



炉1全景



炉1埋土断面



炉2全景



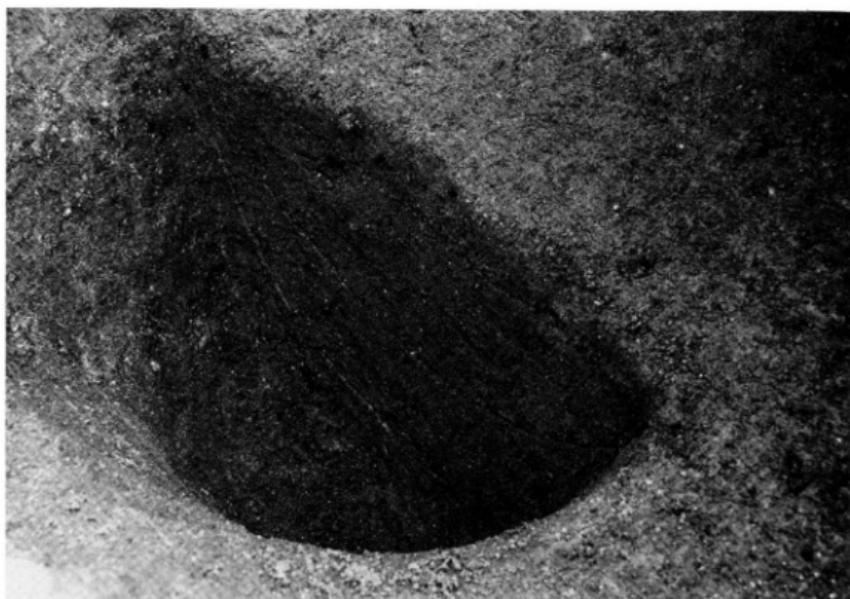
炉4全景



炉6 全景



炉6



土塙断面



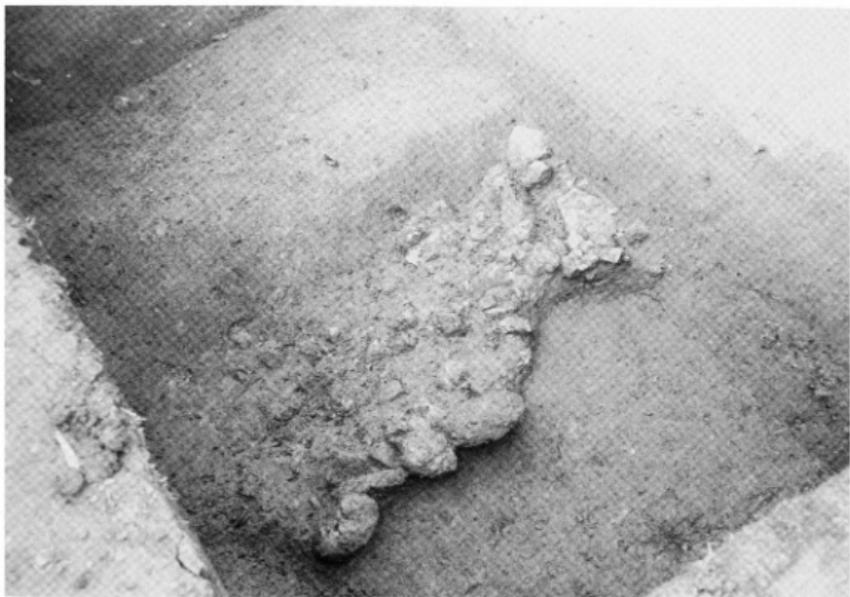
土塙出土鉄器



砥石出土状況



砥石出土状況



大溝1全景



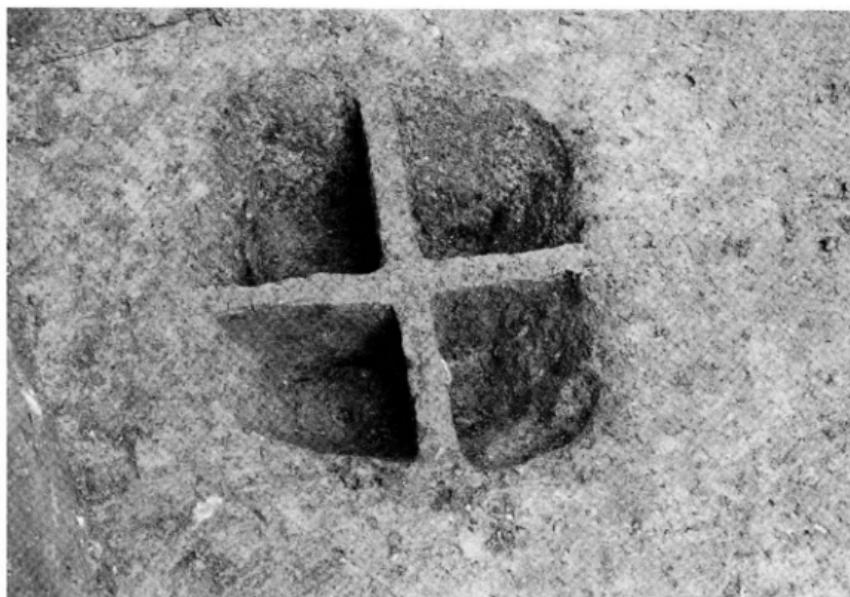
大溝1肩部石列



大溝1埋土断面



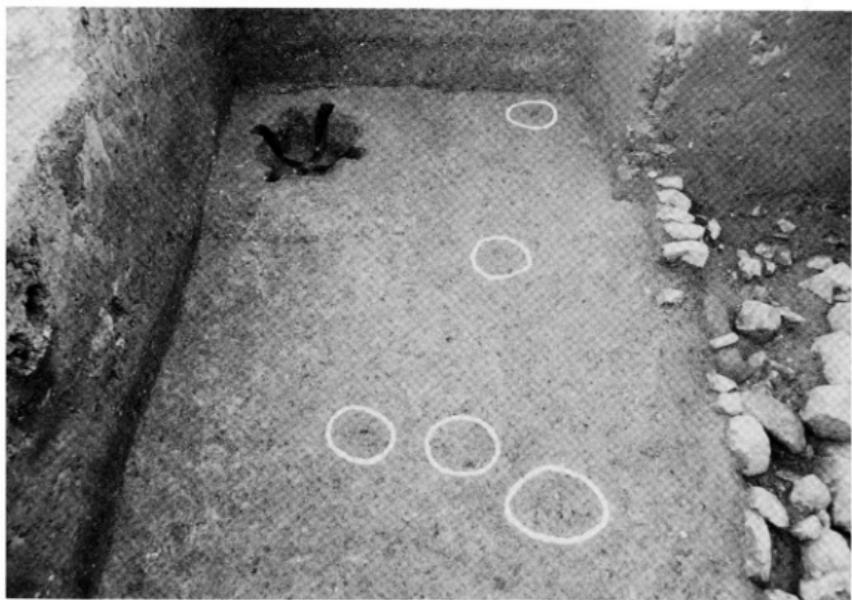
大溝1全景



炉7埋土断面



炉7全景



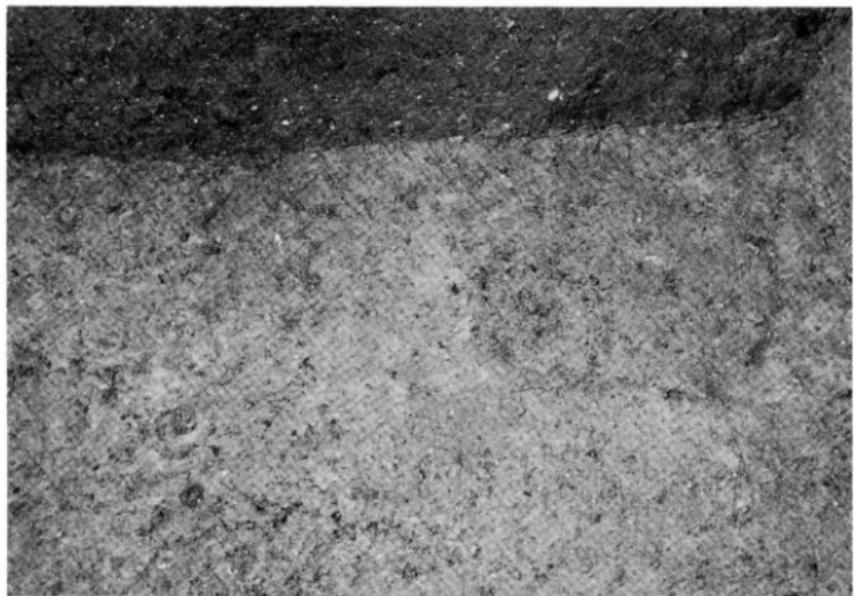
B 2 トレンチ平坦部



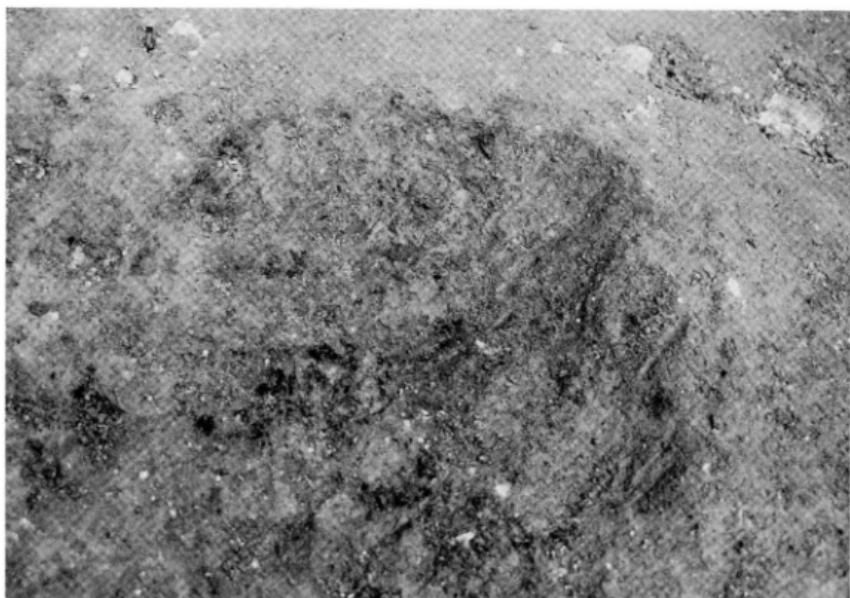
第11層除去後



炉8全景



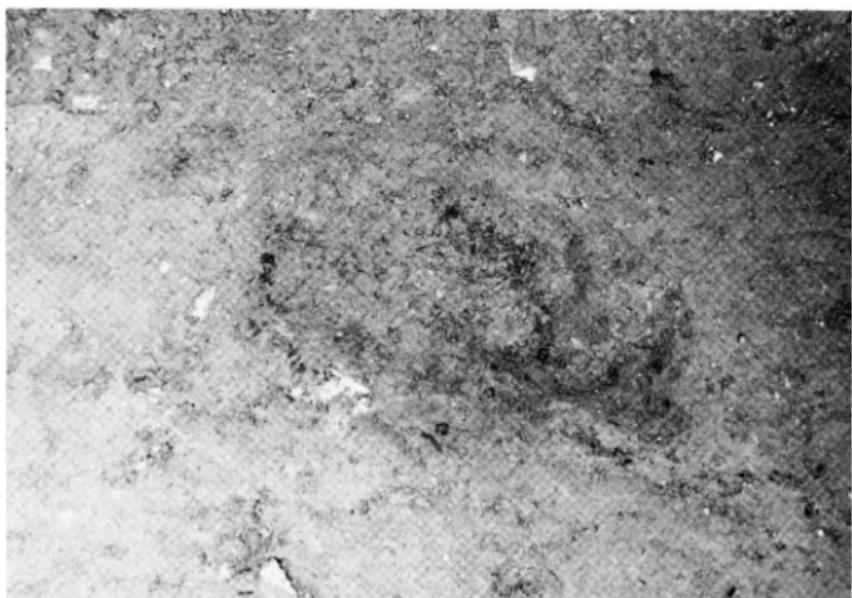
炉8、9検出状況



炉9全景



炉9東立割断面



炉10検出状況



炉10埋土断面



須恵器出土状況



鉄鎌出土状況



B3 トレンチ断面



炉11全景

図版二十三 B三・四トレンチ



B3 トレンチ



B4 トレンチ



C 1 トレンチ全景



C 1 トレンチ断面





上層遺構全景



輪羽口



鉄滓

平尾山古墳群

1986年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成元年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

